

笑ったことのある人

二〇一四年八月

九折空也

〈目次〉

- 牡丹灯籠およびトゥシューズがフシギの森の根に結ばれること
- バフチンから桑田佳祐へ、女性を組み伏した夜を通して
- 白鳥の湖（人はそれに近づいてはならない）元に戻れ
- 劇的などころに恋は起ころ
- リビドーの仕事、ロータリーをぐるぐる回る
- 永遠の生命とかつて少年のバラモン
- Ceu de Azul no Brazil. 笑顔でいることが大切で
- す
- わたしからあなたへの芸術理論
- あとがき、笑ったことのある人へ

牡丹灯籠およびトゥシューズがフシギの森の根に結ばれること

一箇月間続いた扁桃腺炎の、症状は治まったけれども、夏祭りの準備に忙しいアスファルトの夜道を蹴り歩こうとするとき、身の中に砂が詰まっているようなどるさばなお起こった。桃色の提灯の下を歩けば、数分もせぬうち骨身からハハとため息をつかされる。暑く蒸していたが掻く汗は熱気によるのみのものではありえなかった。それでも電車を乗り継いで、友人が以前から用意して招いてくれた（なにぶん僕は先の予定を決めることが大の苦手で、この種のこととは友人に頼るしかないのだ）立川志の輔の落語を聞きに下北沢の本多劇場へと向かった。友人に道案内をしてもらったので、僕の視界にはいくつかの線ネオン管が各所に光っていたという街の記憶しか残らない。新しくした手持ちのデューポン製のライターの、まさに無闇な火力のエッジをシヤアと叫ぶガス音に楽しみながら、むしろその着火作業こそをここ数日の深い楽しみにし、劇場の前で風に吹かれるノボリ旗と同程度にはゆらめく頼りなさで、溜め込むような喫煙をしてから場内に入った。

語られる予定の落語は牡丹灯籠だ。手元の冊子にも場内の垂れ幕にもそのように書かれてある。牡丹灯籠というと三大怪談のひとつとしてすぐにもカラコロと高下駄の足音が記憶によみがえってきた。だがその記憶はイメジであり、よく考えれば高下駄がコンクリートでない地面を踏むときに立てる音を僕は知らない：そうしているうちこなれて聞こえる例のブザー音が鳴り場内がじわじわ消灯すると、完全な暗闇の濡れたような視界の中に、スクリーンに映し出された、志の輔らくご、のたくましい文字が揺れた。そのような飾り気のない正当な演出は、僕の性根にはびこっている好奇心を直ちに刺激せずにはいない。この好奇心はひどく夢見がちで、こいつこそがこれまで僕に全てのよろこびを与えて来、ほぼ全てのやりにくい困難さを与えても来た。

縁台に風鈴の飾られる日本風情をモチーフにした舞台装置が照明に示され、それはただちに、この落語は素直な落語の形では始まらぬということを教えた。脇からするりと志の輔が現れると場内の湧くうちにザザッと口上を始め、聴衆がすぐに食いついたところで、驚いたことに数秒もかからぬうちに聴衆は彼のする、悪い冗談、にコロリとだまされて場内は笑いにドツと沸いた！僕もそれに笑わされながら、それよりもあまりの傑出した技芸に心胆を寒くさせられるほどであった。笑いを本懐とする芸の担当者がよくするツカミというのに当てれば、これは数秒と掛からず、開幕の混濁のうちに、つかまれたと認識する間も与えられずに、制圧、されるほどであった。

当代の天才へ腹を括りなおして向き合う、僕自身は構えとなつたが、その構え

も腰を落とさずらぬうちに、当代の天才が説くのは牡丹灯籠についての、その高下駄がカラコロいう幽霊の話は間違いだ、ということだった。彼が言うには、そういった怪談話の要素は作中にあるけれども……ごく一部でしかない。そもそも牡丹灯籠というのは、全域を話せば口述は三十時間に及ぶ。原作者、三遊亭圓朝が十五夜の連日にわたり人形町の寄席で語りぬいたものに端を発するものだ。機械式の記録メディアがない明治の頃のこと、寄席に日本式の速記術を研究する二人の文士がもぐりこみ、舞台袖で話の全てを速記に記録することが許されたので、現代までその牡丹灯籠という長大な物語は原本を保存して置くことができた。志の輔はそこまでを含めて今夜の接続について先人の恩に深い感謝を偽らず身に染ませて示す態度。たちまち聴衆にも、こうして今宵の牡丹灯籠の物語を受け取れるのは、古い時代からの僥倖が重ねられてのことなのだと思いが湧く。であれば、旧時代の寄席に棲んだかつての霊たちがこの場へ紛れ込んだとしても、時代の連綿として差し支えないことだと思わされる、すでに語り手の術中。飯島平左衛門の後妻風情に収まった女中お国が、内通する源次郎と悪だくみをする、その談合を奉公人の剣士・孝助が立ち聞きに知らされて血なまぐさい選択を迫られる……というサスペンス部分については我々一般の牡丹灯籠の知識にない。美女お露の高下駄がカラコロ鳴るのはもつと後の、別の一幕だ。全体を通しての、主役、が誰なのかという点については、構造上実質に輻輳する。

この、本当は三十時間かけて話す牡丹灯籠を、今夜一晩で話さざるというはどうしたって無理があるんです！ という痛快な声を振り絞る志の輔の頭上に、気の利いたタイミングによって、新たな舞台装置、人間関係の構図を暗示する大きなボードが降りてきた。志の輔はテレヴィ番組の司会役も名人でこなす技量で、暗示されたボードの空欄へ入る人名を適宜貼り付けて解説を進めていくまいやう方で、まず人間関係のおおよそを血肉をもつて語りこんだ。聴衆が外形をかりうじて把握したところで次の幕へと続き、改めて開幕すると今度はきちんと高座に落語家としての立川志の輔が正装し座り込んでいた。牡丹灯籠が始まる……口述されていく牡丹灯籠の物語は、愉快に痛快に、ときに妖しく、幽霊の役割も鮮やかに織り込む形で、聴衆にとっては納得しかゆかないという心地で展開されてゆく。僕は聞き込むうち全身に、特に背中に大量の汗を掻いてポトポトになった。物語が終点に近づき、終点の第一で、ボソリとこのことが話される。「……ここまでは、牡丹灯籠、三遊亭圓朝の原作でございます」。

語りだされる作中世界は、語り手にも聞き手にも明視されたままだ。ここから、一分に満たない程度の、ごくごく控えめな……立川志の輔としての、牡丹灯籠の、その結びが語りだされる。その直截の内容についてはここに書いて明かそうとは思わないが、つまりは、立川志の輔の開拓する熱意の世界として、牡丹灯籠の、主役、は誰なのだ？ という、痛快な締めくくりが示されるのだった。それは、夏の夜のお盆といえど決まって怪談の、高下駄のカラコロ鳴るといえば悪霊という定番の、改めて眺めれば湿っぽさへ偏った古びた和風への強烈な打開を突きつける、短く有効な一撃となった。志の輔は亡き三遊亭圓朝への畏敬を向

けた墓参りの上で、牡丹灯籠を復活のみならず叙事詩に転生させて示したわけだ。毎回のことであるが、こうして志の輔の落語に身を寄せて聞いたとき、僕は会場を出てもまともな直立や歩行が困難になる。ひどい酩酊と、それ以上の使い果たしがあるのだ。それだけの体験をさせるものだから、そうしてフラフラになることは僕にとって本懐のこと。まず異常な量の食事をし（バターフライドポテト、フライドチキン、ソフトクリーム、アイスココア、リブローズステーキ、コーンスープ、マルゲリータピッツァ、うどん）、三刻ほど当て所なく歩行して調子を正常化してから帰宅した。しかし今もなお僕の心は、ふとしたときに牡丹灯籠の作中世界を歩き回ることができるとままだ……

牡丹灯籠の、前日に観た、アリーナ・コジョカルとその一団が示したクラシック・バレエとコンテンポラリーのダンス世界に合わせて、僕は病み上がり身の身にも——むしろ病み上がりの身でしか抱えきれない類の——重要な発見を抱えている。「人間はわけのわからないことをする！」。それを文化といい、営みに認めるのだ。人間はわけのわからないことをするものだから、人類はやむを得ずそれは文化だ営みだといってつながる歴史の中で認めてきた。半ば以上未知のままそれは取り扱われ続けることが優先されているのだ。

このことは久しぶりに手元に転がり込んで見開き、見開くとただちに新しく読み込み始めてしまった大江健三郎の、「私という小説家の作り方」という本に結ばれて、今ある発見を僕に向けてトリニティ構造のように補強しあっているのだ。大江が、自身の読んだ詩や小説の、まともなおし、をする。まともなおし？ 彼らに影響付けられた結果としてのまともなおしを出力してゆくという、それを繰り返す一つのユニットに過ぎない、というのだ。事実としてそうした数十年をやつてみせた一人の作家を眼前において、「人間はわけのわからないことをする」ということを文化や芸術創作の本質として大前提とするのに何の背反があるだろう？ 東に牡丹灯籠が語られ西に白鳥の湖が踊られる。東西を鎮魂する森の根元に大江が棲みついて、それらは僕に必要であったトリニティを形成するのだ。事実としてこれは三日間のうちに連続して紡がれた出来事である……

クラシック・バレエへいくらかでも造詣があり、それに触れたことがある者の中で、アリーナ・コジョカルの名を聞いて、頭上かこめかみの脇にでも「！」の記号を浮かべない人間はいない。英国ロイヤルバレエ団のプリンシパルとしての名声が高いコジョカルについての、その可憐さや、卓越した技術、自身でも果れているという完璧主義、またそれらの全てを越えてある、我々が特別に感じずにはいられない「コジョカル」そのものについてを、僕がここでコメントすることは初めから虚しく感じられる。それは言わずもがな、すでに誰にでもよく知られたことであるから。

僕が僕自身の進みゆきを切り拓いていかねばならないと、追い立てられて感じる中で、僕自身にとって必要な言い方と、またそれは間違っていないという言い方を探るとすれば、まず僕はこうしてコジョカルの名前を文面に表すだけで心臓

をえぐられる胸の痛みを覚える。それはつまり、コジヨカルの踊りが観衆に失恋を強いるということ。コジヨカルは観衆に失恋を与え、失恋のどうしようもなさを思い出させる。このどうしようもなさ……苦しいのに甘い美しいものだから、自ら苦しさを味わう繰り返しに執心してしまう、その愚かしさごと肯定せずにはいられない……ということは、そのままつまり、僕自身のこれから行く先のことへ重ねて当てはめうるのだ。人間はわけのわからないことをするが、そのわけのわからないことへこそ、本当の恋をし、永遠に固定されたような失恋を味わう。その愚かしさこそ、人間の肯定すべき生そのものだ。さあ勇気を出してそれらを生活と分けて文化と呼ぶことに僕もしよう。

アリーナ・コジヨカルという、美しく理知的な女性の名譽のために言い足しておくと、コジヨカルは数年前に起きた日本の大痛手である東日本大震災と、特にそこに生じたであろう孤児の問題に向けて、心を痛められた。そしてコジヨカル本人の強い意向として、五反田の公演にはつきりとしたチャリティーの側面を持たせた。サイン入りのコジヨカルのトウシューズは会場ロビーに抽選のチャリティーの品としてその色合いともども宝石のようにショーケースに飾られており、どう見ても印象に刻まれざるをえないそれは、憧れられて多くの人々の向ける携帯カメラの的になっていた。

引用すると冊子に挟まれた当日のプログラム表には次のようにコジヨカルからのメッセージが書かれている。——私は自分が好きなことを出来る幸運に恵まれています。同時に、皆がこの美しい芸術を楽しむとともに、恵まれない人たちのことを心に留め、彼らを助けることが出来ればと願っています。どうぞこのチャリティーに私とともに参加ください。どんなにわずかな助けでも、大いに役立つことでしょう！心を込めて、アリーナ／I have the great fortune to do what I love and hope that while we all enjoy this beautiful art form, we can help and remember the less fortunate people! Please join me in supporting this charity, every little you might have to spare will go a long way! Yours sincerely, Alina

これを、善意によつてこそ濁りがちな我々の意識に注意深くして素直に読み取れば、彼女は踊ることの表現で孤児を援けようとはせず、この文化的な営みに付随させるチャリティーの機能によつて十分に援けるはたらきができることと捉え、そのことを求めている。このまったく賢明さと博愛の表れでしかありえない意思の示し方は、人間が恋をする「わけのわからないこと」への取り組みと、一見相反する理由ある当然のこととの間に、必然的なやみやり方があることを示しているのだ。そのことは、これからわけのわからないことへの一層の深入りをしているようにする僕の、不安さに脅かされているところへ、背後に確実な温かみを与える一灯になるのだ。

「牡丹灯籠およびトウシューズがフシギの森の根に結ばれること／了」

バフチンから桑田佳祐へ、女性を組み伏した夜を 通して

グロッタ、グロッタ……街路樹の根が土に入り込みすぎ、アスファルトをはがして混ぜ込んでしまうほどの。渾然とした夜の景色である。東京なら夜にも木には木陰があつて、人はまばら、住宅街を抜ける環七に、しばしば道路脇の自動販売機が光源として繰り返される。それらは全て渾然としている。それはそのときの僕が性的な目的に向けて歩いていくためだ。性差の明らかな肉体を寄せ合つてする直截的なそれをしに行くということ。向こうもそれを愉しみに胸を高めて僕のことを待つてくれているに違いない。かつての幸福な男どもが浴してきたように、僕もそうした明らかな目的に向けて夜道を歩くことをしてきた。そのとき夜道は街路樹の木陰を伴つて渾然としたグロッタになる。昼間よりもはるかになつた、みだりがわしいほどの樹木の木肌。生命のなまなましい力がグロッタの中をムンとした精気の立ちこめる空間にしているのだ。

僕はこの道中を歩きながら、流れる空気にはばまいていくようにして、ミハイル・バフチンのグロテスクリアリズムについて語ろう。幸い（といっても僕には嘆かわしいことに）、到着まではまだまだまだ時間がある。まずグロテスクさやその方法とは何のことを指すかについて、それはこのように言われねばならない。

「崇高なものや、精神的理想の表れについてを、唯物的な地位に格下げして、民衆が笑おうとすること」。唯物的ということが答えになる。唯物的ということがわかれば、格下げということもおのずとわかってくる。

バフチンによる、笑いの捉え方は奥行きがありすぎて、この道中には話せない。ただ誰だつて、自分の身の経験から、そこに汚らしい笑いや美しい笑いがあり、否定的な笑いもあれば肯定的な笑いもある、ということはおはわかる。にわかには、クンデラの指摘した天使の笑いや悪魔の笑いにも連想は刺激されるけれども、でもそうしておべんちやらのように拡大していくのは本質的じゃない。

まず、僕が憎む、くだらないグロテスクさの、阿呆みみたいな表現力の有様について話そう。この話はつまり、バフチンの言ったところに対して、「そうじゃないのに」と、お得意の誤解や勘違いをしている類、そうした嘆かわしい類についての話であるわけだけれども。この話はこれだけを切り取っても聞き遂げてこれからの役に立たせる値打ちがあるのじゃないか。要するに、グロテスクといえれば格下げで、格下げといえれば唯物的な地位へ格下げすることなのだけれども、このことを、ひたすら格下げでしかない、ひたすら唯物的でしかない、というやり方でえんえん繰り返す主義があるのだ。僕はこの主義のやり方に、かつて怒りを燃やし、この主義が何の躊躇もなく人々に拡大していくことに信じがたさを覚え、現在はどうかというと、感情を失つたアパシーとなつて、ウンザリとだけし

ている。

たとえば、アフリカの貧困層は、宗教的な教えを学ぶ余裕さえないかもしれない。そうした崇高さについてを検討する時間さえ与えられず、幼いうちにウイルスに感染して病死してしまうかもしれない。そうしたところに、ヨーロッパの、神の慈愛に対して敬虔な、美しい少女を並べてみる。するとどうだ、「お前が神様に祈ることができるのは、ヨーロッパの国としての経済力があるからにすぎないよ」という見え方が演出されてくる。人間の生活が経済という仕組みで運営されているという、唯物的なところを捉えた見方。合わせて、経済力で庇護された有利な環境がなければ、ウイルスに感染して治療もなく壊死してしまう、という人間生命の唯物的な捉え方。

グロテスクというのはそういうことで、グロテスクを主義とする人のやり方はそういうもの。たとえば、ここに前衛的な芸術の何かを示してみたとする。すると彼らは、その芸術に表れているものをどう受け止めるかということではなく、「こんなことをして、メシが食えるというのは、いいご身分だなあ？ あはは」ということを捉えにかかると、崇高なものや、精神的理想の表れについてを、唯物的な地位に格下げして、民衆が笑おうとすること。彼らは驚いたことに、目前の舞台という芸術装置など無視して、舞台上の人間らが帰宅すればメシを食うであろうという、どうでもいいような唯物的な見方をただちに思いつくだ。それは彼らが、ずっとそのことしかしていないからだ。

我々が最近で耳にするもので言えば、労役の質量がぐっと重ければ、社畜、と言われ、過去に性交の経験がある女性は、中古、と言われることがある。実際には、そんな言葉を真剣に捉えているのは、よほど極端に愚かしい、ごく少数派のことではないにせよ。グロテスク主義のやり方とはそういうもので、何もむつつかしいことはない、誰だって社長の悪口を言うときは第一に社長のことをハゲ呼ばわりする、ということと同じだ。唯物的な格下げをして笑いに晒そうとする。それがグロテスク主義の正体だ。

このグロテスク主義の貧しさについて言っておこう。この方法が、誰の直感にも確実に、哀れなほど貧しいと感じられるのは、平たく言つて、これはどんな莫迦の、低能にもできてしまうことだからだ。それが最も愚かしいグロテスクリアリズムの曲学であつても、一応はグロテスクリアリズムであるから、最低限の表現力を持つてしまう。ひどい莫迦の、低能の人間は、他の表現力など持てないから、唯一といっていい自分のこの表現力に依存して振り回す。莫迦でもできるこの表現力の方法は、つまり、映画のヒーローとヒロインを立てて、それをミニチ機械ですりつぶす、というようなことをすればいいだけだ。それは常識的にもグロテスクと言われる。いかなる人間もミニチ機械に掛けられれば肉片といういかにも唯物的なものになるから、ここにはグロテスクリアリズムが成立する。ヒーローもヒロインも格下げされてしまった。「どう？」というわけだ。

この最低のグロテスクリアリズムには、最低限の表現力が伴うにせよ、その表現力には何の方向性もなく、見ている者をワーという気分させる、という作用

しか持たない。まったく虚しいもので、こんなものは、神経が弱くワーとなりやすい人に向けてしかたいた作用を起こせない。

人間がメシを食うということ、経済的に生活しているということ、ミニチ機械に掛けられ肉片になるというようなことは、当たり前のことであつて、その指摘するにも何の値打ちもないところをこぞって指摘するようなことに、何の熱心になる理由があるだろう。

熱心になる、その理由について……グロテスク主義が現代に広がる、思いがけない理由背景についても話しておきたい。思いがけないことに、それは植え込まれた「平等」の観念に端を発している。平等の観念を植えられた人間は、半分は正義を覚えるが、半分はひたすら自分の劣等を認めない傲慢さになる。複数の人間のうちに、崇高なもの、精神的理想の表れを現成できてしまう人間がいたら、それができる人間とできない人間とのあいだには、差別が形成されてしまう。同じ人間でありながら、あの人との褥は崇高であり、あの人との褥は汚辱でしかない、という差別がたとえ起こつてしまう。この差別で劣等を認めるのがいやだから、彼らは本当に、男女の恋仲は美醜と貧富だけで決定していると信じようとする。人間の賢愚も、両親が整えた学習環境の良否によつてしか決定しないと信じたがっている。彼らは断じて自分が劣等だとは認めず、事実上の優劣が生じるのは唯物的な美醜や貧富だけに依ると言い張る。唯物的なアイテムさえ同等なら、自分も「平等」だと根底で信じているのだ。だから彼らは根本的な自己を崇高さへ向上させる努力をしないし、常に内心で優等の者に対する唯物的格下げをはたらきかけている。彼らはどれだけ美しい女優をスクリーンに見ても、「性行為の器として良い具合に違う」といった、唯物的な捉え方をはたらきかけにつぶやいて回ることしかない。

仮に、そうした虚しいグロテスク主義に十年を生きた人間がいて、その十年後にふと、あなたの持つ崇高さとは何か？ と問いかければ、彼は慌てふためき、怒りに激昂するだろう。それは彼にとつて、痛いところを突かれたのだ。

こうした、実際の我々の身の回りに立ち込めているグロテスク主義について、こうして解き明かしをすることは、有為であるに違いない。唯物的な格下げに熱心な勢力があり、彼らはそのやり方に熱心にならざるをえない理由を背景に具えている。彼らはしばしば、自己卑下するように自分の劣等を笑つて言うけれども、こちらが誤解してはいけない。彼らは自分の不細工や低賃金やコミュニケーション能力に障害があるふうを卑下して言うけれども、それら全て唯物的な劣等を卑下ぶに主張するのは、本当のところの劣等を決して認めず平等を言い張るために過ぎないのだから。彼らは結局、身近な人間に崇高さにおいて劣るということを認めずに逃げ切るつもりだ。

さあそれにしても、この見事な、夜のクスノキはどうだ。めくれあがった、岩と土の混じり具合。木肌が、石や針金や、自身の枝、貼り付けられた紙チラシをも巻き込んでうねり……みだりがわしく、渾然としている。寶石を含んだ錫石が不気味に並んで、ここは胃粘膜細胞の顕微鏡写真みたいに見える。このようなグ

ロツタにおいて、縦にぶらさがった幼虫どもは食料だろう。

われわれは、真のグロテスクリアリズム、バフチンが語るうとした祝祭的な力について、ありがたいことに日本人として、最適なサンプルを知っている。おそらく、キリスト教および一神教の世界へ向けて説明を工夫せねばならなかったバフチンの苦勞をよそに、我々は、「マンピーのGスポット」を唄った歌手のことを知っている。xがすごいじゃない、yが上手いじゃない、割れたパーツのマニア……といって、恋あいの崇高さを、即物的な地位に格下げして唄った人間がいた。そこに起こる祝祭的な力こそが、人々に新しく恋あいを教えるか、思い出させるかしたということは、ある程度共有されているかつての社会現象として事実だったのじゃないか。みだりがわしい彼の歌うカーニバルこそが、ぼんやりした女を新しく淑女としてのステージに押し上げてきたことがあったのじゃないか。ここまで話して全容がピンとこないような勘の鈍い人間は要らない。カーニバルとは、謝肉祭と言われ、「肉に別れを告げる」が元々の意味だった。崇高な宗教行事としての、断食や、肉食を禁じる期間がやってくる。それに先立つ前日に、肉をやたらに食いまくらねばならないだろう！ そういう祝祭の色めき立ちがやってくる。唯物としての肉体を、唯物としての大地グロツタと接続し、大地から生み出される酒池肉林をも同時にやみくもにして味わう。カーニバルといったらだちに肉体の酒池肉林への接続を覚えないような勘の鈍い人間は要らない。これからやってくる格上げの営みに先立って、十分な格下げを営む。そのとき、人はまったくよく笑う。バフチンがカーニバルに祝祭と笑いを見つけ、そこに陽気で嫌味のない力があると唱えたことに、異論のある人がありえようか？

逆説的に、人々が崇高さに墮落しないために、格下げの力、グロテスクリアリズムの力はある。僕自身、ずっとそのようにやってきた。僕は実は、グロテスクリアリズムの知識に出会ってから、それを自分の中に吸い上げるのに、五年の歳月を必要としたのだけれど、吸い上げてみれば何のことはない、これは僕のネイティブとして使ってきた方法でしかなかった。

僕は生まれた土地にアイデンティティを探すタイプではないけれど、事実として幼少から思春期を大阪の南部で過ごした。その、誰もが知るユーモラスな語尾の発音を持つ言語とそれによる文化の中、格下げといつても……そもそも当地には格上げそのものがないぶん貧しい。バフチンの指摘が今さら「笑い」を指摘したところで、僕にとっては今さら「笑い」に注目することは馬鹿馬鹿しいことだ。そこにある陽気な祝祭の力について、知っているのみならず、僕は根本的に、それ以外の力について自分の内に心当たりがない。他に方法が無かったのだ。

僕はそれを、唄えるのではないが、恋あいといえは粘膜であると、やはり格下げのようなことを唱えてきた。みだりがわしく渾然とした、グロツタの中へ一緒に溶け込んでいくことだ。それはなんと陽気で、お互いよろこびあう祝祭ムードのあることだろう。うわっはは！ カーニバルに、唯物の最高峰、女性の粘膜が正當な地位を取り戻す。僕は女を組み伏したのだ。女の脚はうねって絡み、その両手は僕を肌に取り込んでゆく。みだりがわしく……

今もちようどそのことをしにいくと言った。グロツタ、グロツタ……この精気に満ちた、夜の木陰を歩いてゆくのだ。

「バフチンから桑田佳祐へ、女性を組み伏した夜を通して／了」

白鳥の湖（人はそれに近づいてはならない）

（暗転）

（風の音、吹雪の音。高まってゆく）

（風の音！ 吹雪の音！）

（白鳥たちのガアガア鳴く声。高まっていく）

（白鳥たちの、攻撃する声！ ガア、ガア！） 攻撃する声のおぞましき！

（これはいつ止むのだ？ まるで悪趣味だ！）

（表示、「白鳥の湖」）

（表示、「人はそれに近づいてはならない」）

春でさえ冷たく、夏は弱く、厳冬には氷雪に閉ざされる地域の、平坦な森や湖と共生する、確かな人々の話である。少女オデットは、信心深すぎる祖母の言うことへ、形式的な生意気を返したりしたが、祖母の言いつけを守れぬほど不埒な娘ではなかった。

「どうして？ おばあさま、あの湖には白鳥がいるわ。それは、蛇や鱔はいないということに違いないのよ。白鳥たちは、あんなに優雅に泳いでいるのだから」

祖母はつねづね、孫娘の慧眼をよるこんでいたが、それだけに魔が差すようなことがなければよいと、老婆心を忍ばせていた。しむだらけになり、このごろは震えるようになった指先で、林檎の皮むきをしていたのをオデットに代わってもらい、

「オデット、いいかい。あの湖には名前があるけれど、それを今お前に話すことはできない。あの湖の名前は、悪魔の器という意味を持つからね」

「でもおばあさまは、その名前をご存知なのでしょう？ それは矛盾のあることだわ」

「オデット、それはお前が、いつか好人に娶られて、長く時が過ぎ、眼も細くなって行って、ずっと後で知ればいいことなのさ。いいかい、あの湖に近づいてはいけない。それがある朝美しく、森を逆さに映してお前に呼びかけることがあっても、それは遠くから眺めればよいことで、近づいてつまずきを濡らすことはないのさ。いいね」

「おばあさま、わたしは、記憶力の良いほうでしてよ」

オデットは剥いた林檎をナイフでいくつかに割いてやると、佳い形の器へ並べてやり、祖母の脇机へ乗せてやった。お茶をお飲みなさる？ と問うのへ、祖母が首を横へ振るので、オデットは搾りたての山羊の乳を温めてやり、カップへ移して祖母の手元へ添えた。

「お出かけしてくるわ、おばあさま」

オデットは祖母の首筋に絡まりついて、その頬へキスをして差し上げた。祖母の無骨な手は指先を震わせながら、まだ腰の強い生えたとのオデットのおぐしを芳しい作物のように撫でて梳かした。

無論その日のうちは何事もなくて……そのまま二つの短い夏を過ぎ、秋口にも雪が降り始めたころのことだ。オデットは少女のうちにも妖しさをもつほど美しくなり、彼女の愛する祖母は、気丈夫とはいえ本格的な医者に世話を受けるようにもなり始めていた。

出歩くことの少なくなった祖母への、快気への足しにと、オデットは道草に、この季節のみに咲く野花をしゃがんで摘んでいた。今年には特によく咲いたようだった。このたくさんの水を吸う花は湖の周りに咲きたがった。これまでは注意

深かったオデットも、美しいものを愛で始める年齢になり、それでいて、美しいものが自分を惑わしていくことはまだ知らずにいた。オデットがそのことに気づかされて、はつと面を上げたのは、喉をつぶした蛙のような、ガア！ という白鳥の一鳴きだった。しゃがみこんで花の咲く先へ先へともぐりこんでいったオデットは、湖のほとりに至っていた。まだ名前を知らない、知ってはいけない名前を持つ湖のほとりである。

「白鳥さん！ ああ、あなたはこんなに大きい姿をしていらしたのね」

「ガア！ ガア！」

「どうしたの、気を難しくしていらつしやるの？」

お子様を育てていらつしやるのかしら。そう疑い、見渡してみたがオデットにはわからなかった。

それにしても、間近で見ると白鳥は、本当にこれほど大きいものだったかしら？ このようなものが、空を飛べるものかしら。

いかにも自分が歓迎されていない様子であることに、オデットは少し口を尖らせておどけた。

「白鳥さん、お邪魔をしたかしらね。だとしたら……いいえわたしは、花摘みにつられてきただけなの。わたしも、あまり長くここにいてはいけないと、言いつけられているのよ。また冬を越して、春が来たらお会いしましょう？」

先ほどとは違う方向から、空に風が巻いて、吹きすさぶ音が湖に響いた。そして、ガア！ ガア！ と鳴きはじめた白鳥の声は、今度は一羽ではなく複数のものだ。それは無数の声となって鳴り響き、湖のほとりを取り囲んでいた。

「どうされたの！」

オデットはさすがに立ちすくみ、摘んだ野花の束を胸元へきつく抱きしめた。

オデットは初め、白鳥を狩る違法の猟師が来たのだと思った。白鳥たちはそのことへ怒りと警告と抵抗の声を上げていたのだと思っただけ。このあたりでは珍しくないそのことへ思いが至ったとき、なあんた、と胸を撫で下ろした。見渡せば、このあたりには希少な立ち枯れた広葉樹が、湖のほとりに傾き、一人の男がその根元へたずんで見つかつたから、オデットはまったく息を吹き返した。白鳥さんたち、ほら逃げなさい、あなたたちには危険なことだわ、とオデットは白鳥たちを促したが、嘴をまっすぐ天に向けて叫ぶことをやめない白鳥たちは、ふたたびオデットを立ちすくませた。まだその言葉を知らないオデットにとつても、白鳥たちのそうして鳴く執拗な姿は、異様だったのである。

男が近づいてきた。一層高まる白鳥たちの声に、オデットが驚いたことには、男は木陰にいて黒ずんでいたのではなく、男自体が陰なのであった。両手両足があり、手に持っていたのは鳥撃ちの銃ではなく長い柄の鎌のようなものだ。近づいてくるうち、それが人間の背丈であるわけがなかつた。そして何より、近づくと顔のない頭が縦に並んで三つある。それを左右にうごめかして近づいてくるのだ。

見慣れないものへ眼を奪われたオデットは、凍り付いて動けなかつた。近づいてくるそれが悪魔であることをオデットは理解し、たちまち悪寒もしていたが、恐怖と共に、それ以上の負けん気が、オデットには起こっていた。

「悪魔なのですか？ 知っていますわ。でも、何も悪いことをしてきていない人間を、悪魔は死の国に連れてゆくことはできないはずでしょう。わたしはそのことも知っていますわ。そのように教わつてきたし、わたしは記憶力の良いほうなのだから！」

事実、しばらくの間であつたが、三つ頭の悪魔は、目の前まで迫り来たくせに、そこからオデットに何もできなかった。オデットに明らかに関心を向け、覗き込んでくるのは、嗅いだことのない醜臭い臭いでオデットを怯ませたが、潔白のオデットを妙な気持ちにさせたのはそのことではなかつた。

「あなた、泣いていらつしやるの？ 何かを苦しんでいらつしやるの？」

三つ頭のうごめきが、ときおり引きつって、オデットにそのことを気づかせたのである。

オデットの、柔らかみを帯びた声が、三つ頭の悪魔に聞き取られると、三つ頭の悪魔は身をよじるようにして、確かに苦しんでいるようだった。その姿に、オデットはふと、悪魔の心のうちに、とてつもなく長く続いた、哀しさの苦しみがのたうっているのを感じ取つた。

どれだけの時間、その苦しみが続いているのかは、まだ幼さの範疇にあるオデットには到底わからなかつたが、オデットは直感的に、それが人の生の時間をはるかに越える長さで続いているのだ、とわかつた。

「哀しいことが忘れられないでいらつしやるの？ ねえ、わたくしに何かして差し上げられることがあるかしら？」

悪魔に親身になりすぎてはいけな、と心に留めつつ、それでもオデットは困

り果てていた。どうすればよいか、思案したあげく、まず名前を聞き出そうとして、でもこの方は言葉を話すことができないのだわ、と思ひ至って行き詰つた。でも字を書くことはできるかしら？

かすかに、今度はオデットの側が、背の高い三つ頭の悪魔へ、覗き込む具合だつたが、やがて苦しそうな三つ頭の悪魔は、その手にあつた、柄の長いぼんやりした鎌のようなものをオデットの肩口へ振るつた。それは寝ぼけたような動きで、鎌はオデットの身体を何の感触もなくすり抜けた。その途端、オデットはすうと眠るようになって、美しい寝顔のまま、朽木のように湖の水面へ倒れこんだ。オデットを囲んで、赤紫の野花在水面に浮いた。白鳥たちは再びけたたましい鳴き声を上げた。

「王子、王子？ 虫も殺さぬジークフリード、はどちらにおいでかな？」

「狩猟に出ていらつしやるよ。例によつて、撃つわけではない鳥撃ち銃をぶら下げられて！」

「独身最後の？ ではまた木立とお話をされて、木の実をもぎ、小鳥と話されて、明日の天気を知られてお戻りになるでしょうな！」

「やれやれ、この国の行く末は！」

この地を統治するのは、強大ではないが弱小すぎるでもない、それよりはでたらめに長い伝統だけを誇りにする、一つの王家である。現王はかつて王としての威厳に満ち、威容もあつて貴族らと臣民を畏怖させたが、大きな病に罹患して以降、それが癒えても氣勢は恢復しなかつた。年齢以上に老齢に見えた。そこに政略に長けた貴族たちがつけこんで、貴族たちは国政の玉璽と王族の権威を半ば手の内に掠め取つた。それでも篡奪が未だ起こらないのは、貴族たちが貴族同士で派閥争いの牽制をしい、まとまらないからに過ぎない。かといつて、貴族同士の謀略の仕掛けあい、内紛じみてまでは起こらないのは、今のところ隣国との戦争が機運に高まつており、そのことに向けては全体で備えないと、別の危機に呑まれる見込みだつたからだ。

そうしてみじめな王政を、近々引き継ぐ立場に、ジークフリード王子はいた。宮廷は、翌日に執り行われる舞踏会へ向けての準備で忙しい。この舞踏会は実質的にジークフリード王子の後選びとその婚姻儀式に位置づけられている。そうしてジークフリードが后を定めれば、早いうちにも現王は退位宣言書を寝床から示す手はずなのだ。統治といつて、「戦争はいやだ」程度しか言わぬ精薄なジークフリードが王となれば、王政はますます傀儡にしやすいく。

王子の後選びは、「よりどりみどりですな」と尚書に擲諭されたように、表面的にはよりどりみどりであったが、候補の娘たちは権勢に及ばないところの家柄だけで慎重に選び出された心の無い踊り子にすぎない。幼いころから、虫も殺さぬ、と、侮辱的に言い表されるジークフリード王子の気質は、事実であつたから、ジークフリードは今さら後宮を企んで自暴自棄の漁色で自己を慰めていく気にもなれなかつた。ジークフリードが意欲のない狩猟の姿で湖のほとりを歩いてしたのは、ただわざとらしい祝福風情に満ちる宮廷の空気が厭でたまらなかつたからだ。

明日には后を持つ身になり、ひいては近々、何の尊厳もない玉座の上に座らされる。どうせ僕が何を言つたつて聞きやしないのだから。ジークフリードはひどい憂鬱の顔で歩いてた。全ておしまいだ、という気がしている。しかしそれよりも、ひどい眞実は、全てがおしまひになる以前に、何も始まらないまま終わるのだ僕は、ということだ。よい思い出といえ、今はもう亡い、かつての乳母が絵本を読み聞かせてくれた、その膝元の匂いと声の名残だけだ。あのとこはいくらかでも素晴らしかつた。虫も殺さぬという言葉方をするけれど、そうした気質は、人間としてまともなことなのだと、ジークフリードは内心にだけでも、胸を張ろうと努めてきた。あのとこきの乳母がいたら、僕の言うことをわかってくれるだろう。戦争をして、へつちやらだなんて、そちらのほうがどうかしているのだ。

それにしても、絶望的な気持ちで、ジークフリードは湖の周囲を歩いていた。三步遅れて、友人役の男がついてきているが、これは友人役であつて友人ではない。この男にはひどく知性がない。世話役の息子だからということだけで、いつからか身近に押し付けられただけにすぎなかつた。冷たさが目に突き刺さるような世話役グリーンそのものがついてくるよりは余程ましだから、ジークフリードはこの知性のない男を付き添わせている。いくらかこの男が愚鈍でも、ジークフリードが隣国の諜報と内通の密会をしていたら気づくだろう。ジークフリードにはそのような意思もないし、そのような大それたことをする気概もないのだが、それでも目付け役なしとはいかなかつた。

ジークフリードの目に、湖は鉛色で、茫漠としていた。まるで、遠大な金属の溜まりだ。対岸までゆけば見知らぬ形の狼などに出会うことがあるのだろうか？ あるいはいつそ、それが餓えた虎でもかまわない……あの針葉樹の森の中に、未だ人に知られざる洞穴があつて、その地底をずつと行くと、話に聞いた海と砂の景色のところに出るのでは？ そういった夢想も、ジークフリードの憂鬱な顔を明るくしなかつた。全ては終わったのだ。ジークフリードは、目印としている立ち枯れた広葉樹の脇に座り込み、懐から羊皮紙と木炭を取り出しては、スケッチの準備をする。

見張りをしている、という、意味を為さないことを命じると、友人役の男はダアといい、茂みに分け入っては、隠し持ってきた葡萄酒を呑み始める。男のぶらさげた麻袋にはジークフリードの召し物など入つておらず、彼の目当てである葡

萄酒の皮袋しか入っていないのだ。そして彼はどうせすぐに全てを飲み干して、いびきを掻かぬよう横を向いてうずくまつて寝る。それでもひどく汚い寝息を立てるが……そうしたことはいつものことで、むしろジークフリードにとつても都合のよい、両者の暗黙の合意だつた。男は根っからの、何も考えることをしない人間で、これまでにジークフリードが彼から聞いたまともな話といえる話は、唯一、彼の父であるグリーンは、実は左目が悪いのだという、そのことだけだつた。

座り込み、腰の短剣を抜くと、ジークフリードはその刃で木炭の先を失らせていった。王族に継承される短剣は、王子十五歳に帯剣させられるものだが、この高貴な宝飾の刃を黒ずませることは、ジークフリードにとつてささやかな、自己の宿命への反逆だつた。けれどもそのことも初めのうちだけで、今はもう、全てのことについて、わけがわからないとしか思えなかつた。スケッチといつても、彼の心の目が本当に捉えているのは、眼前の湖などではなく、自分を囓う宮廷人どもの卑しい顔だけだ。しかしそのことにも、彼はもう慣れてしまつていた。この日は珍しく、湖面はひたすら風いでいた。

夕刻には王宮に戻らないと、経験上、グリーンから懲罰が下される。サーベルの稽古に擬された懲罰は、いつもジークフリードを痛めつけ、自尊心を踏みにつつた。背が高く、発條のある四肢から繰り出される斬撃は、速く巧みで、気も力も弱いジークフリードの抗し得るものではなかつた。若い頃は勲章を受けるほどの技量だつたという。懲罰、に重ね重ね自尊心を踏みにつられてきたジークフリードは、いつからか、自分の側こそがその剣に手抜きをするということをやりはじめた。そして、血なまぐさい斬りつけでしか自己を表現できない者への、憐れみについて考えながら、それをすることにしたのだ。すると、気配に気づいたグリーンは、まずまずその斬撃を加虐的にするのだが、その圧力に満ちたフクロウのような目つきは後の悪夢に出てくるにせよ、ジークフリードにとつては、何か本質的なことについて、してやったりという心地を得ることができた。——グリーン、お前がそうしてくつきり半身に構えるのは、左目が弱いからだろうか？ それは昔、技量を上にする剣士とやりあつて、目を打たれたからではないのか？ 片目をやられたフクロウは、気を荒くするけれど、もはや獲物を捕らえられないと聞いたぞ。

しかしこの日、夕刻を過ぎてもジークフリードは立ち上がる気にならなかつた。身を寒くするようなあの懲罰も、舞踏会を前にしてサーベルの稽古とはいかないだろう。今宵は満月になるそうだから、闇に道が見失われることもない。

そして何より、きつと今日が最後ののだ。こうして、醜男一人を付き添ひに連れて、湖のほとりに来られるのも、これから先は、もつととやかく言われるに違いないし、そのうちに力ずくの篡奪が起これば、自分などは塔にでも幽閉されるに違いないのだ。

ジークフリードは嘆きにうずくまつた。それはジークフリードのよく取る形だつたが、この日はそれが長かつた。両手首の内を両目に当て、手のひらに天を向かせて、腕の内に表情を隠す。ジークフリードは、自分の腹の底に、何かが弾

けそうになるのを感じていた。何が弾けるのかはわからなかったし、それが本当に弾けるのかもわからなかった。ただ思わせぶりな何かの錯覚に過ぎないかもしれない。

「ついに、僕自身まで、僕を苦しめにくるのか？」

——誰も彼も、心の内を貧しくしすぎている！ ジークフリードにはそのことが嘆かわしかった。自分が富むために、剣を抜いて人を殺めるなど、どうして許されるわけがあるだろう。僕には、そのような心が起こること自体わからない！ そのときのことである。両腕に狭められたジークフリードの視界の中に、湖面を滑ってゆく一人の人間の姿があった。それはあまりにも自然に見えたので、あやうく見逃しかけ、その姿のうっすらとした光に、今宵は満月だったなというこだけを思い出させて、過ぎ去りかねないところだった。いつの間にか夜が更けていた。

「今度は幻影が僕を傷つけにきたのか」

そう心中につぶやいて、自嘲に嗤い、それでもジークフリードはさすがに気になるので立ち上がり、傷つけられることへ心の準備をしてから、ぼんやりと月光を受けて滑っていったそのほうへ、歩み進むことにした。見ると、月光を受けた湖面の先に、白鳥の群れがたまたまいる。それは珍しいものではなかった。しかし奇妙なことに、それは人間の姿でもあった。踏み進みながら、人間の姿へ焦点を結ぶと、それは人間の姿に見え、尾のほうから白鳥へ焦点を結ぶと、それは白鳥の姿だった。目が潰れたのかとジークフリードは思った。しかし爪先を濡らすほど湖に近づくと、彼女たちはやはり人間であった。そうはつきり見えたのは、近づいても白鳥は本来こんなに大きくないと気づいてからのことだ。

「そなたたちは？ ここで何をしているのだ」

白鳥たちは、全て若い少女であるようだった。すでに一部は、半ば人の心を失いつつあるのか、まばたきせぬ目で湖面とジークフリードを均等に眺めている。けれども多くは、悲しんで泣いているようだった。ジークフリードの呼びかけに応えないのは、声が出せないのか、あるいは……すでに鳥の声しか出ないことが彼女たちを辱めているのかもしれない。

ジークフリードも、この湖が口伝でいまわしく畏れられているところがあるのを知っていた。悪魔がいて、呪いがあるというのは、本当のことだったのか？

珍しく完璧に凧いだ今宵の湖に、満月が遠く映りこんでいる。青白い光に照らされて、立ち尽くし泣いている少女たちの背後で、一羽の白鳥が、眠っていたのであろう首をもたげ、立ち上がって少女の姿となった。少女はまだ背が低く、群れの中でも特に若年に見え、血色は無く、すでに肌は白鳥の羽の色だったとしても、瞳には精気があり、最も人間らしい表情をしていた。彼女が進み出ようとするとう白鳥たちは左右に分かれて湖面を護った。少女の威厳が白鳥たちをそうさせるようだった。

近づいてくるほどに、少女はその異様な美しさを明らかにした。少女の眼差しがまっすぐジークフリードに向けられ、その心が通ったとき、ジークフリードは、

むしろ白鳥の少女にこそ、生まれて初めて一個の人間の心を見たのだった。ジークフリードは、初めての体験に、かかとから背中を抜けて脳天までを痺れさせる電流のようなものを味わって震えた。美貌のうつくしさではなく、人間のうつくしさに打たれたジークフリードは、立っていられぬ心地となり、気づけば片膝を地面につき、少女へ拝礼の姿を取っていた。少女はジークフリードに、待ち焦がれたように両手を差し伸ばした。

「あ……ああ、ああ！ 来てくださったの！ あなたは、目に付いたものを何でも撃つ、あのひどい猟師たちではない方だわ」

「なんと、あなたは美しい声でお話しされる！」

「声が……うまく出なくなってきた、恥ずかしいかぎりですの。ねえ、聞いてくださるかしら。そして、わたしたちを救うのに、少しの力でも貸してくださいませんか！ 誰か知恵のある人へ報せて、ここへ呼び寄せてくださるだけでもいいのです。でもどうか、お見捨てにならないで！ わたしたちはまったく困り果てていて、ごらんの有様！ お許しくださいさる？ わたしはこのように哀しいおしゃべりを本心からしたいわけではないのに、やむを得ずそうさせられてしまうこのことを」

ジークフリードは生まれて初めてのことには歓喜していた。その歓喜は、これまでジークフリードのまるで知らぬものだったので、ジークフリードを立ち上らせ、跳ねさせ、ねじるように躍らせた。その声は抑えきれず、近くを徘徊する虎にも目をつけられかねない大ききで響いた。

「この夜……なんとこの恋心！ 全てのことは上手くいくだろう！ 美しい人！ わたしが下人に鳥撃ちの銃を預けてきたのは、あなたを救済するためと、こうしてあなたのお話を聞くためだったのです。新しい国から来た白鳥の少女！ わたしはこの国を治める王家の、第一王子ジークフリード」

「いいえ、わたしはこの国に暮らす一人……ですから、あなたの臣民ですわ。ねえ、聞いてくださる？ それにしても、あなたが王子さまでいらつしやうたなんて！ このわたしのときめきが、殿下、あなたに察していただけるものでしょうか？ あなたはきつとわたしたちを救ってくださいさるし、わたしは受けた恩を決して忘れないでしょう。こういったことを僥倖というのでしょうか？ 王子さま、わたしがこうして湖の淵に浮かんでいることしかできず、そのぶん、年齢にふさわしい勉強が遅れてしまっていることを、どうか許してくださいさる。ジークフリード王子殿下、わたしは羊飼いの丘に住むあなたの臣民オデット」

「わたしがあなたについて許さぬことがあるものだろうか。いいえ！ わたしは、虫も殺さぬ、ジークフリード！ 思えばわたしの満たされぬ、甚振られもした日々は、こうしてあなたに会う日のために、しようがないことだったのだ！ オデット、わたしの話を聞いてくれるか？ わたしがこうして今日のあなたに出会うために、これまで功德を積んできたことを？」

「ええ、ええ……もちろんですわ王子殿下。しかし今夜のうちは、どうか憐れなわたしたちのお話を、先にお聞きくださって！ 何しろわたしは、朝陽が草を

照らすころには、人の心を忘れ、蓮の葉を食む白鳥として過ごさねばならないのです。そして明日の夜には今夜のように話せるとは限らない！ どうかお憐れみをくださって。殿下、わたしは悪魔のもたらした白鳥の呪いのこと、そしてわたしが気がかりにしている祖母のことについてお話ししなくてはなりません」

「ダー、ダー、わたしは快くそなたの、楽器のような声を、よろこんで心に聴くことにしよう。今宵わたしは、そなたの望みをかなえるのに最高の人でありえているだろうから」

月明かりの下で、オデットの声はかすかな鈴の音のように響いていった。オデットは恐ろしい悪魔とその呪いのことについて話し、どのようにすればこの呪いが解かれるかを話した。オデットは、身体を悪くしていた祖母には医者や薬と生活の援けが要るはずで、今どのようにしているのか心配でならないと話して涙ぐんだが、それらのことを全て話し終わる前に、ジークフリードは声を高くし、よろこびで饒舌になった。

「あつはつは！ ああ！ 今日は何んという日だろう！ わたしの恥をござらんほらよろこびの涙が、玉のようにあふれているが見えるだろう。わたしの麗しいオデット、そなたは明日の日没後、なるべく早く王宮に來られるといい。舞踏会の門番へ、オデットを名乗る美しい少女が來たら、胸を受け渡して開門するよと言いつけておくから！ これまで誰も愛したことのない男が、そなたに愛を誓うとき、白鳥の呪いが解けるといふなら、今日までのことはたいしたことではないさ」

「ジークフリード王子殿下！ それはどういふことかしら、わたしは祖母から人には礼節を尽くすよう、言われて育った一人の娘でしかありません。殿下はそんなわたしを助けてくださる？ 慈悲深いお方！ けれどわたしは、こうして呪いを深くした他の人々のことを放つてゆくことはできません。どのようにすればよいか。ああ、どうかわたしの探るべき道を教えてください」

「必要なことの全ては後からついてくるだろう。祝福の道へ、おいでオデット！ この国の王子は王女となったやさしい娘の祖母について知らんぷりはしないと誓うだろう。そなたの氣に病む他の憐れな白鳥たちのことも！ オデット、そなたの瞳は、老獺どもの濁った目に、傷んだ豆と黒真珠の違いを教えるだろう。あいつらもすぐに理解する！ 想像してござらん？ 誰もが戦争を取りやめ、虫一匹も殺すことにはばかるようになった国の幸福を。そういつたことがこれから始まる！ それはそなただ、オデット！」

ジークフリードが手を差し出すと、慣れぬ手つきでオデットがそれを引き受けた。ジークフリードは腕いてオデットの指の甲へ口付けをした。数羽の白鳥がガア、ガアと鳴いた。ジークフリードがよろこびのままにオデットの手を引いて踊り出すと、オデットは慌てふためきながら、しかし次第に、人として動き回ることにの久しぶりに、よろこびが起こつて愉快そうに踊り、顔をほころばせて回り始めた。水面が何度か水音を立てた。白鳥がガア、ガアと鳴いた。他の白鳥たちも祝福している、とジークフリードは言った。そうした光景を遠くから悪魔が眺

めていた。悪魔の脇には、もう一匹の悪魔がいた。

王宮の石造りは堅牢で古すぎて、いつ建てられたものか文献にも遡れない。高い天井の梁には四百年前のいざこざの矢が刺さったままだ。そうした伝統の長さに敬意を払われて、文化的には軽んじられていないこの国の祝宴には、貴族たちももちろん、近隣国の権力者の名代や、商人や宗教の名士たちも馳せ参じていた。王宮が幸福になるこの日、鐘楼から名人の打つ鐘の音が響いて、

「弦楽の者、前へ！ 打楽の者、左右へ延べよ！」

ただちに演奏が始まった。立ち話をしていたドレスたちの群像は動きだして華やき、燕尾服たちは直立で手のひらを打った。腕の太った料理人たちが次々に羊の丸焼きと巨きな川魚の香草焼きを数人がかりで運び込んでくると、対立する貴族たちも食い気に艶めて笑い休戦した。奪い合わずに済む肉なら、冷ますのは愚かしいことだった。

この世には不幸とか病氣とか、寿命とか死とかいったものは無いように思われた。大きさはさほどではない王宮に、高級な香を焚きしめた肌の、白色と褐色が踊り始める。留め具を早くから外して金の髪を振り乱して踊る者もあった。得意の木貝を手の内に打ち鳴らす者もあった。特級の酒瓶と花型グラスが運びこまれると、注がれるのを待ちきれぬ悪女が瓶ごとをひたたくて口をつけて呑み、衆目に笑いが高まったところ、男女がくるくる回りあう流行りの踊り方に運ばれて、酒瓶は踊り場を次々に人の手に渡っていった。やれやれ！ と全ての人がそれを許した。

祝宴に慣れきらぬ若い人間が、二人ほどであるが、視界をひざませて膝から折れて倒れた。そのことも笑いの戯画に飲み込まれていく。そうして祝宴の陽気に当てられる人は珍しいものではなかった。看護隊が少年じみた刈り込みの妖精役の服で現れ、冷水の手当てが出来る奥の部屋へと担ぎ出して行った。

この国の人々は、上機嫌なジークフリード王子という、そのありえない顔と振る舞いを初めに見た。それは祝宴の前にはしばらく人々を驚かせたが、祝宴が始まれば、王子も愛を乞う娘らの健気さに火のようになられたに違いない、ということ片付けられた。

開幕にふさわしい派手好きの楽曲が締めくくられると、拍手が沸き起こり、各所で杯が掲げられた。ただちに続く演奏が、ゆつくりとした流れと、荘重な和音で始まった。念のためというふうには一時に鎮められた。

ジークフリードはほとんど心に音楽が聞こえていなかった。グリンに脇を

つかれるまで気がつかなかった。この国の成り立ちを表す伝統的楽曲が奏でられ、それに合わせてジークフリードは階を降り踊り場へ入り込んでゆく。海が割れるように人だかりが分かれたれ、人々から改めて勇氣ある拍手が打ち鳴らされると、ジークフリードはこの日は堂々と一礼した。

「皆さん！ 誰にとつてもよろこばしきこの日！ この国の未来に平和を約束することは、あなたがたの未来に平和を約束することと、何が異なりましようか？」

ジークフリードの語りかけというより、ジークフリードが声を張り上げることの珍しさに、人々は面白がり、その面白さは、特に酒精にほこんでいた人たちによく響いた。単純な歓声が、またそれだけに無闇に高く起こった。そのことは、浮かれたジークフリードにとつても本懐だったので、ジークフリードは満足そうに微笑んで歓声に一礼して応えた。人々が口々に、「平和を！」と杯を掲げた。古い詩句として、「あのタイガの森のごと！ 深く静かに豊かに永く、生える苔にも畏怖を持たれて」と唱える者もあった。演奏が再び、陽気に踊りうる打楽器の打ち鳴らされるそれに切り替わると、人々は足音を立て、無限に続く酒池肉林にもはや引き返さない構えとなった。

「王子さまは、気の早い方。もう浮気していらっしやるわ」

祝宴の実際的な陽気と、ジークフリードの様子が常と違うのに、踊り子にも社交の見せ場を期待して色めきがあったのに、娘が口を尖らすのは、ジークフリードが浮かれたばなしで、調子はよいのにずつとどこかを余所見しているからだ。舞踏会の入り口へ、新しい娘の参上があったとき、門番は報せに太鼓をド・ドンと打ち鳴らして開門する。ジークフリードはずつとそれに聞き耳を立てているし、鳴つてもいない太鼓の音を幻聴するし、太鼓が鳴ればしきりに首を伸ばしてそちらを覗き込もうとするばかりなのだ。

数人と踊り、いささか疲れ、内心では待ちくたびれたジークフリードは、氷に白葡萄酒を垂らした飲み物を喉にやつて心身を冷やした。内心……オデットは来てくれるだろうか？ 来ないかもしれない！ そうして心の内を寒くもしたが、ただちにオデットの眼差しが思い出され、ジークフリードは嘆息と安堵をした。そうしたことがもう何度も彼の心には繰り返されてきた。オデットのあの眼差し、あの声……オデットが約束を反故にして僕の心を打ちのめしたりするはずがなかった。オデットが約束をしてくれた！ このこと以上に、世の中に信じられることが他にあるだろうか？ これは綴じきれぬほど重ねた条約の紙切れを途端に反故にするあの国士たちのすることではないのだ。

数度の落胆を経て、しかしついに、ド・ドンと鳴ったゆるい太鼓の後、その先に現れた姿がジークフリードの心臓を跳ね上げさせた。息を呑んだのはジークフリードだけではなかった。貴族たちも、踊り子たちも、誰もが老若や男女を忘れて、突如現れた、見知らぬ、異様な美しさの娘に、眼を奪われた。演奏を続ける楽隊もその演奏を間抜けにゆるめてしまったほどだ。集まって突き刺さる視線に、美しい娘はゆつたりと礼をして返した。

「ああ、オデット……オデット！」

ジークフリードは、場違いな声を上げて、急ぐ夢遊病のような足取りで、オデットの元へ駆け寄った。目前に立つと、改めてオデットの美しさが、自分に記憶できるようなものではないのだと思ひ知らされた。どのように眺めたのか、足元に黒く磨かれた靴が光っている。オデットは鳥を模した優雅なドレスを着ているように見えた。

目の前に、なんとというオデットの微笑み！

オデットを出迎える気の利いた台詞を全て忘れてしまったジークフリードは、色めき立ちに震える一礼をして、踊りを誘う手先の構えを、やはり震えながら伸ばして示した。衆目は、知らされていなかった一幕に純粹な興味を向けて見入っていた。これから何が起こるのか誰にもわからなかった。ジークフリードにさえ目途が立たなかつた。ただ、鳥のようなドレスから美しい足が伸びており、けたはずれ的美貌が飾られて磨きこまれていて、この娘には全ての資格があるということだけを、誰もが認めていた。

オデットが、王子の誘いかけに、優雅に手を重ねて引き受けると、このときばかりは、何もない純粹な、割れんばかりの拍手が起こった。それによって、何もかもが新しくなつた。誰も彼もがおとぎ話の中にいるのだ。そういった詩人の言葉も疑われずに済むときがきた。

王子と、美しい娘のため、その二人のためだけに音楽が演奏された。二人のためだけに踊り場は大きく空けられ、残された者は二人を飾るために周囲を控えめに踊った。踊りの手順が角を踏むたびに、全ての人は惜しみない拍手を贈った。すでに誰もが、王子が后と踊っているのを見ていた。

舞踏会は果てしなく続いていく。踊りの手を休めても、しきりに周囲に「きみもオデットの美しさをご覧よ！」と、はたらきかけて止まないジークフリードは、紅潮した若い王子として、このとき無性に愛された。グリーンでさえ耐え切れずほころびて笑い、一目置いたように深く長い一礼をジークフリードに示した。

ひいては、演奏をする一面の、指揮台へジークフリードが上がりこみ、指揮者を押し出して演奏が急停止したときにも、全ての人は愉快さに熱く一斉に笑ったのみだった。指揮台の上から、全ての人へ向けて、演奏を中止させたことには理由があることを、ジークフリードは胸を張る態度で示した。

「みなさん！ 今日は大いに笑つて！ 昨日までの僕に対して、含みのある人も、そうでない人も平等にね！ そして、こうして僕が鷹揚にならざるを得ないなら、あなた方も、すっかり鷹揚になつていて、今さら、予定されていた手はずが少々狂うようなことになど、誰が気に留めて悪酔いしませようか？ ご存知のとおり、時計塔にまだシリウスは差し掛かっておりませんが！ しかし然るべき機は満ちたようです。わたしが后を認め迎え入れることを、あなた方が最後まで見守つてくだされば、それはあなた方の飲み食い、朝まで味良くするに違いない！ さあ、麗しきオデット！」

オデットを踊り場の中心にして、ふたたび人々が、大きく輪を作つて、オデッ

トのことを尊重する。ジークフリードは矢も盾もたまらず、ほとんど駆け寄って滑り込むようにオデットの前に片膝をついた。それは求婚の作法として様式からずれたが、衆目はそれを王子の意思と受け取ることができた。

「ああ、美しい、わたしの恋人よ！ あなたの前にわたしの愛は無く、あなたの後にもわたしの愛はない。たとえ太陽の光が永遠でなかったとしても、わたしのあなたへの愛は永遠であると、ここにわたしを誓わせよう。たとえ蛇の枯れる万年の荒地があつたとしても！ やがてはわたしが沃土の緑野としてみせるだろう」

静まりかえつた場内は、オデットのどう振る舞うかへ注目してのことだった。オデットはジークフリードよりも身を低くする無理はせず、無言で、ジークフリードの脇へ寄り添い、妻の位置を占める意思を示した。衆目に、オデットは完璧な后であつたから、満足して一斉に拍手と歓声が起つた。

ジークフリードがせわしないやり方をしたので、準備に入っていなかった女官たちは用意した紙ふぶきを天窓から降らせることができなかつた。楽隊の指揮者が気を利かせて、慌てて祝福の歌の重要な部分から演奏を始めさせた。突然祭りの後となつた舞踏場に、いくらか落胆する人々の気配もあつたが、したたかな彼らは、落ち着いて美酒と健啖をじっくりやりやつていく構へ切り替わつていった。

祝福を受けながら、王子と后は舞踏場を引き取り、絨毯の敷かれた道筋で、王家の寝所へ歩いてゆく。寝所で、后は初めて妻のするそれとして、王子の足を薬湯と香油で洗うことをする。誰にも見られないが、そうするしきたりらしかつた。全てのよろこびに、雲を踏み心地であつたジークフリードは、寝所で身体を熱くさせ、あちこちの筋肉をちぐはぐにわななかせていた。祝宴の喧騒は石壁のいくつかに阻まれてはるかに遠くなつた。いくらなんでも落ち着かねばと思ひ、寢床に座り込んだジークフリードは、つい慣れた彼の形をする。両手首の内を両目に当て、手のひらを天に向け、両腕で顔の表情を隠す。オデットは寝所の端を覗き込んでいたようだった。

ジークフリードは、ずいぶん長い時間そうしていた。恍惚と、よろこびと、それ以上の何かに呆然としていた。ああ、オデット、僕はきみに何から話せばいいだろう？ これまで、自分を取り巻く全てが忌まわしい、永い時間があつた。それらは今、明日には何一つ思い出せないだろうという予感がするほど、薄弱に、溶けて流れてゆきそうだ。

ごつんごつんと、無粋な木戸を叩く音がして、ジークフリードは眠つていたわけではない眼を覚ました。あのおう、と呼びかけてくる愚かしいふうの声は、ジークフリードに日常の興奮めを与え、それはむしろそのときのジークフリードにありがたかつた。ジークフリードは愉快な気になつて扉を開いた。

「あのおう、何です？ ご成婚、おめでとうございませう、つてやつで」

「まったく、きみの不粋には寧ろなした！ わざわざかしこまつてどうなつた？ 今日こそは、きみも隠れてこそこそ酒を呑まなくていいというのに」

「それでやんすがね」

ずんぐりとした肉の男が、珍しく引き下らないので、そのことはジークフリードに興味を持たせた。

「あのおう、あつし、見てやんしたよ。どえらいべつびんで。そのう、昨日湖の端で、なにやらお話ししてらつしやつた娘でしょう？ あつし母親ゆずりで眼だけはいいもんで」

「金細工職人でもしていたかな、きみの母親は！ それで、きみの役に立たない抜け目のなさを……」

「違うんです、王子殿下！ 殿下は、あの娘を……お后さまを、オデットと呼ばれるでしょうか？ 違うんです。あつし、門のところ、彼女の名をオデイルと聞きましたよ。ただね、どえらいべつびんでしたし、なにより昨夜、殿下が親しげに、楽しそうに、お話しされてるところを見ていますでしょうか？ それで通しました。オデットのほうはですね、来たんですよ。オデイルの少し後でしたが、ただ、こいつも同じ顔して美人かもしれませんでしたが、俯いて髪も乱れて、何より裸足だつたんでね。お言いつけどおり、オデットだからつてんで、お通しはしましたが、さすがにその格好じゃでしやばらないでくれつて、あつし言いつけたんです。するとね、まあ言われなくてもつて風情でしたが、娘はこじんまりと、舞踏場の隅で、まるで掃除婦みたいに、一番目立たないようにしていたんですよ。いつのまにか、ふいつと消えていなくなりましたが」

「きみの……冗談は！ オデットの顔をした人間が二人いたら成り立つだろう。ありもしないことを言つてどうする？ 不相応の酒もきみを上手い饒舌の持ち主にはしてはくれない」

「殿下、あつしはね、実はグリンの、実の息子じゃないんで。父とあつしとじゃ格が違うでしよう？ ま、それは今話すことじゃございせんか。殿下が、湖でね、娘と話し込まれてるとき、見ていりやゾツとしましたよ。面妖な娘に話し込んでるところ、それをじつと見てやがる、面妖な黒いのがいたんです。そりやもう怖くてね、近づけもしませんで。殿下もああいうことしちやいけない」

「愚かだ！ お前は！ 酔を酒にして飲みこみ、夢をうつつにして小便をする男だつたか！ 黒いのの与太話は百聞いた、今日はその百一つ目だ！」

手荒く扉を閉じ、ジークフリードは怒りに心臓が高鳴るのを痛みに感じた。まったく馬鹿げたことを言う。それは彼が馬鹿げた男だから、やむを得ぬことかもしれないけれども！

「ああ、オデット、オデット。すまない、荒げた声を聞かせてしまつたね。虫も殺さずに来た果ての夜だというのに！ そちら、寒くはないかい？ もつと火の当たる、明るいほうへおいでなさい。まだその馬具は油のにおいがきつくて、胸を悪くするものだから」

ジークフリードは何度もオデットの名を呼んだ。なぜか、自分でもわからぬほど、自分からは近づこうとせず。

オデットの背丈は明らかに高くなり、並ばずともジークフリードより高いのが

わかった。なぜなら髪が天井に擦りそうだからだ。ジークフリードは、これまで何度もそうしてきたように、自分をよく守ってくれる気分になるやり方で、鼻から深く息を吸い、視線を斜めに下げてみた。これまでに嗅いだことのない、饅えた何かの臭いがした。

「これはどうしたことだろう！ 僕は歩かされている。こんな夜更けに、横殴りの風雪を受けて、闇夜に道も定かではないのに！ まるで歯車に乗せられたように」

ジークフリードは何もかもが自分の意思でないような心地で歩いていた。自分を一ひねりにつぶしそうな巨大な闇夜に、なお黒い雲が垂れ込めて、まるで景色は人の世ではないが、ジークフリードはまるで前もって知っていたような気がする中で、何の目的も立たない道筋を歩いていた。

「どこへ行く僕？ オデットのところに決まっている。オデット！ ああオデット、今ごろその首筋に雪を受けて、傷ついた心を甚振られているに違いない寒そうに」

ジークフリードはオデットに詫びねばならなかった。オデットに会い、今宵のことを許してもらなければ、明日の太陽など決して東の丘に上って来はしないと思われた。一方で、ジークフリードの心は恐怖に支配されていた。破壊がちらついている、当然……ところが恐怖の支配が強すぎて、心が恐怖を覚えられないでいる。ひいては、心がどこかへいつてしまった形で、まるであやつり人形のような手足のちぐはぐさになり、ジークフリードは歩いているのだ。

恐怖と、オデットへの愛と、全てを失った破壊の中で、ジークフリードは顔を笑わせるようなこともできた。つまりジークフリードはまともでなくなっていた。それがどうなるかということも、全てはオデットが握っていることなので、ジークフリードは壊れた手足のまま、ときには不明な笑い顔などとして、湖のほとりまでゆくしかなかったのだ。

湖のほとりには、風になぶられる葦原しかなく、横殴りの風雪が視界を閉ざしている。広大なはずの湖も、見て取れるのは足元の黒い水溜りでしかなかった。

「狼どもよ去れ、そして白鳥たちはこちらへ！ オデット……聞こえるかいオデット。今夜は十六夜が雲に隠れて、声が届くほどには姿は見えない。だからこちらへ来ておくれ！ オデット」

何度叫んでも、オデットはおるか白鳥の姿はなく、この夜更けの風雪には、鼠一匹も巢穴から出ない様子だった。次第に、叫ぶジークフリードも、自分は夢遊

の果てに甕の中に叫んでいるのではないのかという気になってきたが、それでもなお叫び続けたのは、ジークフリードにとつて今さら王宮に戻ることは、湖の果てまでいくより百里も遠いように思われたからだ。帰り道のなさがジークフリードの行き先を決定づけた。

叫び続けて、喉が焼けてきたので、ジークフリードは湖面に直接唇をつけて、その水をすすった。一部には薄氷が張り始めていた。喉の焼けるのは治まったが、水の冷たさはジークフリードの身を凍えさせた。

再び叫び始めようとしたところ、湖面の漣に眼がいった。一定する漣の、その流れの一部が分かれたれている。眼を凝らすと、そこには白鳥の腹が浮いていた。遠巻きにはあるが、白鳥たちは自分を見物しにやってきていた。

「白鳥！ そうか風雪から身を守るためには、そうして羽毛の姿で過ごすのであろう。来てくれた、オデット！ 何度でも言おう、今宵は十六夜が悪い雲に隠れてしまって、声が届くほどには、姿が見えない。僕の言うことがわかるね？ オデット！」

ジークフリードが湖面に踏み入ろうとすると、

「来なさないで！」

と、強い調子の制止が掛かった。声の出元は風雪に遮られて見えない。

ガア、ガア、と白鳥たちが喧騒に応じて鳴きはじめた。

「来なさないで！ 全てを終わらせてしまったあなたに、わたしたちの住処へひとつの小石でも投げ込んでよいことはないわ。わたしたちは、いえわたしは、あなたの後姿が遠のいてゆくことだけをよるこぶでしよう！」

「オデット、その声はオデット！ 僕はお前に詫びねばならない。そのために窓を割って僕はここへ出て来た。気が変になりそうだった！」

「裸足のわたしを王宮に呼びつけて、足の裏を搔いていたわたしを笑いものにした、そのことをお詫びなさりたいのでしょうか？ ジークフリード、いえ、名も無きどこかの人！ たとえどのような嵐がわたしを打つても、わたしが受けた辱めを洗い流すことはないでしょう。あなたはそれだけのことをした人！」

「オデット！ ああ、きみに、僕がどのようにしてここへ来たか、そのぶざまな姿を見せてやりたい！」

オデットが強い調子で怒りを示すのに、ジークフリードは愕然となった。オデットが自分を突っぱねて許さないことに、改めて、振り返ったときの自身の破壊が思い出された。婚姻の誓いを示したところで、翌日には後に逃げられた！

お后さまはご消失なされたらしい！ どのような嘲弄が王宮に響きわたるだろう、季節がめぐる間ずっと……これからの王子は、いや王位を継いだとしても、その権威は、篝火につられてきた一匹の甲虫ほどにも扱われまい。このような失態に、グリンの懲罰！ グリンは特にこういう不始末を毛嫌いする。

自分がいかに帰るところが無いかということ、オデイルなる悪魔がどれだけ巧妙で悪辣だったかということ、ジークフリードは熱烈に説いた。オデットからの声は応えてこなかったが、オデットが人の言うことを聞き流したり、本心

に受け止めず消してしまったりすることはできないと、ジークフリードは知っていた。なおも語り続けた。

「……だから、きみがどうしても言うのなら！ 僕はあなたの目の前に、これだけは持つていくという僕の勇気を示そう。僕が短剣を腰にぶら下げているのは、何も宝石の重みが人を慰めると信じているからじゃない。飾りじゃない！ そのことを示そう、そのことしか僕にはないというのなら」

ジークフリードは跪き、短剣を抜いて、己の首筋にその刃を当てた。その刃はひんやりとしてよい味がした。ジークフリードは思いついて、——恐怖はないんだ！ と叫んだ。

その叫びはジークフリードにとつて本心だったし、上手く叫ぶことができた！ とジークフリードは思いもしたのだが、正直なところでは、よくわからないのだった。よくわからないということは、恐怖もよくわからないことにした。短剣で首を切断しても、威勢よく話し続けられる気がした。肉は切れても血は出ない粘土細工にヘラを入れるようなことだという気がしていた。

眼を閉じて首筋に剣を当てていたところ、ふと、白鳥たちのガアガアいうのが止み、ジークフリードの首筋へ、小さくやわらかいものが当たった。眼を開くと、目の前にオデットの姿があった。オデットは唇を噛んで泣いていた。小さな唇は形が歪んで蝶々のようだ。

「なぜそんなことをなさるの。卑怯なもの！ 卑怯もののジークフリード！ たとえあなたが、どれだけ恨めしくたって、万が一にも首筋に刃が刺さってしまえば、この風に血が散っていくことがあれば……わたしは悲しまざるをえないのです。これ以上の悲しみを、背負ってわたしがどうして生きていけるでしょう？ ジークフリード」

「ああ、オデット、オデット！ 僕は全ての目が覚めた。このとき！ 僕は世界中の全ての木の葉について意味が言えるし、麦酒の面に浮く泡の一つごとにだつて見つめてものが言えるようになった！ きみがこうしてそばにいてくれるなら」

「ジークフリード！ 風に飛ぶ花の種が、塩湖に落ちてしまったときの悲しみのように、もしあなたが憐れなわたしに、わずかでも親しみと慈しみを向けてくれるのなら、このことを聞いてちょうだい。湖に水が張りはじめています。この氷に魚たちが閉じ込められる前に、わたしは人の姿を取り戻さねば、わたしはもう、なぜ自分が人間だったかを思い出せない、首をかき上げた白鳥になるでしょう。それは近づいているのです。わたしの嘆きがわかっています。ジークフリード」

「ああ、ああ！ そんなことはさせない。太陽の王に命じてでも、時間の精霊に心臓を捧げてでも！ それで僕にできることは？ オデット」

「わたしをここから救い出せる、心のよい人を。身を投げるような……わたしを初めての人として、認めて救い上げてくれる人を、ここにお連れになって、ジークフリード。そのような方は、もはや三つの国をまたいでいらいっしやらないかもしれないけれど」

「そんなこと！ そんなことは……ああ！ 容易なことに違いない。僕にはお前を救い出すことが全てなんだ。改めての謝罪と共に僕はそれをしよう！ オデット、きみのことを一目で愛し、これから部屋の片付けでも怠らないと誓える人を見つけたことは、秋雨の降った翌朝の森にきのこを見つけたことよりも簡単なことだ」

「それでは、ジークフリード？ わたしは待てばいいの？ 明るる朝も、朝陽は他ならぬわたしを照らしに来てくださるのだと、無闇に信じてよいあの日々のように？」

「もちろんだ、オデット！ 僕は何でもできる、なぜならきみがいるからだ！ こんな調子になったことは初めてだ。全ての証拠に踊ってご覧にいれようか？ オデット！ ちょうどこれが、短剣を持つ者の舞としてあるものだから」

ジークフリードが踊り出すと、白鳥たちははけたましく鳴きはじめた。踊りながら、王宮にいる小姓たちか、あるいは聖歌隊の幼い組の誰かを連れてくればいと思つた。彼らはまったく従順で、言われたとおりにし、それでいて顔かたちのきれいな者だから、オデットも厭な気持ちにはすまい。そうしたらオデットは救われるし、僕は毎日の朝食をオデットと向き合つて取ることにしよう。特別な鳥が生む卵をよい乳脂でほぐしてもらつて。水気に張り詰めた青菜や、酔につけた妙薬のきのこなどを食べるとしよう。オデットには精をつけさせないといけない。長い湖の暮らして、肝腎を細くしているに違いないから！ ええい、白鳥たち、うるさい！

踊りながら、ジークフリードがそれを急に凍りつかせたのは、視界に、鋭い目つき、フクロウを見つけたからだ。フクロウ！ と思われたそれは、人間の形をしており、正装をした、背の高い男だった。男は、じり、と近づいてきた。

「グリーン！ どうしてお前がここへ！」

見慣れた王宮の、見慣れた姿が、異物のように割り込んできたことで、興奮めがジークフリードを正気にした。ジークフリードは、思わず笑ってしまった。

急に、何もかもが済んだ気が、ジークフリードにはした。オデットとの二人きりの時間を断られたのは、口惜しかったが、何かそれも妙な解決のように思え、ジークフリードは一息ついた。もはや何を慌てることもないのだ。であれば、全ての人の手で、物事を進めてゆければよい！

「グリーン、そなたなら聞いていただろう。全てのこと！ 今宵はともかく、明日にでも……」

ところが、歩いて近づいてきたグリーンは、ジークフリードには一瞥もくれず、そのまま湖の奥へ進んでゆく。足元が濡れることも、このときグリーンは気にかけないようだった。

オデット。彼はグリーンというんだ。王宮での、僕の世話役でね。ジークフリードは笑ったまま、そのようにオデットに明かそうかと思つたが、気が変わった。まさかグリーン？ お前だけはいけない。

お前は、そうしてオデットの目の前に立ち、何をしようとしている？ そう

いった冗談を、お前はする男ではないので、それは似合わないことだ。
お前の息子は、お前の実の息子ではないそうだな。妻はどうした？ これまでいなかったのか。そういうことはあるかもしれない。それにしても、お前は何をしている？ お前はすでに中年だ。そしてサーベルを振り回すひどい暴力を趣味にした人間だ。

お前がそこから、舌の根のわずかでも動かすことは、許されない。グリーン、全てのことを許す僕だが、お前だけはいけない。僕を無視して背中を向けているが、それは僕を軽視してのことか。お前はたしか左目が弱いそうだな！ 左からの剣の影には、お前は気づけない欠点がある。

ふと、グリーンとオデットは、何かを話し始めそうだった。あるいは、そのような気がしたし、そのように見えた。

ジークフリードは、短剣を強く握り締めると、飛び出して、グリンの背後からグリンのこめかみを斬りつけた。それは咄嗟に、ジークフリードのこめた力よりも渾身の一撃だった。

鈍い音が出て、剣はこめかみに深く突き刺さった。刃は顔の半分近くを割って、抜けずに刺さったままになった。

オデットの悲鳴が上がった。白鳥たちが嘴を天に向けて責め立てる声を上げ始めた。

「わは、わはは！ だらしないぞグリーン！ お前、今何をしようとした！」

サーベルの名人？」

ジークフリードの内でも何かが弾け、抑えきれない力が湧き起こる。憎悪はジークフリードの喜色の顔となり、怒りの声となって、割られたグリンの頭部へ投げつけられた。

「オデットは、やらない！」

しかしグリーンが頭をもたげてジークフリードのほうを振り返ると、そこにはグリンの顔はなく、それどころか誰の顔もなかった。黒ずんだ影そのものしかなかった。気づけばその背丈はすでに人間のものではなく、短剣の刺さったまま、頭部は三つに並んでいた。

悪魔がその三つ頭をゆらゆら揺らし、ジークフリードに、嘲って告げた。それは声ではなく言葉でもない。

(それ見たことか)

それだけ告げると、悪魔は打ち込まれた短剣によって倒れた。倒れると悪魔は湖に溶けていった。悪魔を溶かした水面は黒く濁り、その濁りは漣に乗って散っていくようだった。

白鳥たちの声は怒りに猛っている。

ジークフリードは笑い始めた。上手く気づかされたことへ起こった笑いだった。ジークフリードは、引きつってぎくしゃくとした笑いに、自身で立っていられぬ様子になったと思うと、うずくまり、両手首を両目に当て、腕の中に表情を隠して、なおも笑い続けた。

「それ見たことか……それ見たことか！ なるほど悪魔か、全てを上手に暴き立てる！ 僕は誰とも馴染まずにきたわけだけだ？ 自分とも馴染んでいなかったとはなあ！ 僕は愛する人の顔の見分けもつかぬ男で！ 恋敵となれば背後から眼の悪いところを狙って頭を割る。虫も殺さぬジークフリード、何のために生まれてきた？ ジークフリード、そら、意外に手厳しいオデットが、もう僕のついた嘘と偽りに気づいているぞ。何ひとつをも僕の思い通りにさせないために」

ジークフリードは立ち上がると、よいことを思いついた笑い顔で、一歩ずつオデットに詰め寄っていった。怯えたオデットが身を翻して逃げようとするところ、その肩を掴んでジークフリードは抱きしめた。

「オデット、僕のオデット。僕はきみのことだけは、他の誰にもやれない。よいせりふ！」

オデットを抱きしめたジークフリードは、オデットを抱え込んだまま、一歩ずつ、湖の奥へと進んでいった。

白鳥たちの責め立てる声が無尽に響いている。

「ジークフリード！ あなたは！ ご自身が滅びるのに、わたしのことも滅ぼそうとするの！」

「オデット、僕のオデット。僕は！ きみのことだけは、他の誰にもやれない！」

「ああ誰か！ 助けて、誰か！ あ！ この方はもう！」

救いを求めるオデットの声は、湖面の下へ引きずり込まれてゆき、水音混じりになると、いくつかのあぶくを水面に残して消えていった。

風雪が吹雪となり、白鳥たちの嘆きに満ちた叫喚が響きわたる中、オデットの手のひらだけが湖面に突き出している。救いを求める形に開かれたまま、それもゆっくりと沈んでいった。

(風の音！ 吹雪の音！)

(白鳥たちの、攻撃する声！ ガア、ガア！ 攻撃する声のおぞましき！)

(いつまでも止むことのない)

(暗転)

(表示、「白鳥の湖」)

(表示、「人はそれに近づいてはならない」)

(閉幕)

(照明、カーテンコール)

「白鳥の湖(人はそれに近づいてはならない) / 了」

一元に戻れ

空からパツと風が降りてきて、全部がパアになった。やっついてられない。

ああ、おれの高度な芸術理論が……

これでまた、十万字ぐらいが無駄になった。

忘れないうちに書き留めておくと、ヒントは「寂しさ」にある。嘔み締めていい。

寂しさがあるとき、初めて、寂しくない、という状態があるのがわかる。

そのことへ向けて、正常な戦いをする、そのためにも寂しさが感じられていることが必要なのだ、とわかる。

寂しさといって、ジタバタする類のものではない。到底、そんなことをする気になれないものだ。無理やり言えば、寂しさは寂しくなんかしない。

十年近く、文章を書いている。十年ほど前からそのことを始めたのだが、果たしてそのことは正しかったのかどうか。悪い習慣が身についただけじゃないのか。僕に身近な人が聞いたらびつくりするだろうが、僕には芸術なんて要らない。大江健三郎とその文学作法も、正直無くて結構だ。その他の全ても、自分の役に立つからといって愛するふうにはひどいウソだ。

芸術といい、文化といい、それらはもちろんすばらしいものだ。人間の体験として、99点まではいく。社会生活上の生産とは無関係に、人間の想像力上に連鎖する影響づけあいの結果が示されていく。それ自体に、人間の想像力が直接の価値を認める。

しかし、天から風がパツと降りてきたら、オワリだ。なんだこりや、やっついてられるか、となる。「想像力は人間のステイトではなくイグジスタンスである」とブレイクは言う。すごいことを言うものだと思うが、それでいうと、どうしてもイグジスタンスよりも上位の体験があると言わざるを得ない。99点ではなく100点のそれが。それは天からパツと風になって降りてくる。何だそりや、やる気がなくなるのも甚だしい。

大江も要らなければブレイクも要らない。イエーツもバシユラルもバフチンもクンデラも要らない。岡本太郎も要らない。それらの全てを、僕自身の体験してきたことと結合し、現代で最も有益な芸術理論に仕立て直したのが、僕の十年がかりの到達点だったのだけれども、到達点で何だといえ、要らない。別にゴミとは思わないし、あわてて捨てたり焼いたりするつもりはないが、こんなものやらないので、少なくとも手に持っている必要はない。何しろ、天からパツと風が降りてきた。暑い風と冷たい風が混じって。そうしたら全部オワリだ。仏教が悟りを押すなら、申し訳ないが悟りも要らない。そんなものを希求しなくてはならない困窮はどこにもない。寂しいから、満たされていないわけだが、そのことに不満はないし、納得もないのだ。せいぜい感想ぐらいしかない。僕は一人で

やっついていけるので放っておいてくれ。

そうしたら、元に戻った。どこからともなく、いつからか生きていた僕の僕だ。そりや当たり前だ。

文章を書くといつて、上手い描写なんかする必要がどこにある。上手い描写をしたければすべいいいが、したからといって何になるのか。そんなもんならないだろ。想像力といって、想像力の活性化をしないといけない理由がどこにあるのか。ああもう猛烈に眠りたくなってきた。

僕に身近な人はびつくりするかもしれないが、すばらしい作品はしよせん作品だ。世界の中を直接歩き回ることに勝てるわけがない。その証拠に世界は芸術を重視していない。僕のやるべきことや為すべきテーマなんてものは一切無い。一人でやっついていけるというのに、何を思い出す必要もない。

「元に戻れ／了」

劇的なところに恋は起る

昭和の後期に生まれてきた僕として、向き合わなければならない、影響づけ、についての、奇妙なとりまじめの話をしなくてはならない。僕が中学に上がって丁度のころ、当時の天皇が崩御され、年号は新しく平成と定められた。それを受けて父が、自宅にぶらさがっていたカレンダールの蒼い海の上へ、太いマジックインキで「平成元年」と大きく書き表したことに、その高潮した字体を受けてか、当時の姉がしきりに痙攣するほどに笑っていたのを思い出す。このことを話しておけば、僕自身が歩んできた少年時代の時代的背景は滑らかに読み手に受け取られるだろう。つまり僕は昭和の末期から平成の初期にかけてを少年として過ごしている。当時はいわずもがな、コンピュータの陳腐化と共にサブカルチュアが大きな産業として立ち上がることの黎明期であった。

僕自身、もし少年のころから詩や小説といったものから影響づけを受け、その文脈を自然に受け継ぐ形で現在へ至っていったら、このような奇妙な話をここでする必要はなかっただろう。さて前もって言っておきたいのは、すでにゲームという呼称を言えばほとんど無条件でビデオゲームを指すように、ビデオゲームは、たとえ手元になかったとしても、人々の知識に普遍化した。そのビデオゲームが表すいくつかのジャンル分けがあり、代表的には？と尋ねれば、即座にアール・ピー・ジーと略称で言われるか、もしくはロール・プレイング・ゲームと答えに言われるだろう。このRPGと呼ばれる概念が正統的に扱われるのはこれがコンピュータゲームが主流になる以前の、テーブルゲームとしての遊び方にも元々あるからだ。テーブルのTを付けて、TRPGといわれる。その独特の遊び方に、今でも愛好者は、趣味のコミュニティに語りえる程度には、少なくないのではないかと思う。

けれども僕自身が体験してきた、影響づけの実際を捉えて言えば、これらをジャンル区分としてRPGだと言い表すようなことは、実体験に向けては有効でなかった。別にRPGかシューティングか、アクション動作性に偏るか……といったことと区分に関わらず、僕——ならびにきつと多数の少年たち——を影響づけてきたのは、つまるところ主人公とストーリーの表れが気になってくる、劇場型、のゲームだったと言わねばならない。この劇場型ゲームという言われ方が、適切に、然るべき場所で語られれば、そのことをよく知った聴衆からは、無闇な拍手が起るに違いないだろうと、僕は空想の中で笑うことができる。

もし僕と同じ性質の誰かがいて、同様に、劇場型、のそれへ没入していく経験を持ったとしたら、内心でしきりにこのように確信されることを体験したのではなからうか？ つまり、よくできたゲームが連作ともなると一時期は社会現象とまでいわれた売れ方になり、そうした遊びに不熱心な者の手にもそれらが届くようになる。そうしたらひとしきりはそれをいじって、操作して遊んでみようとする。

攻略への情報が学級の休み時間にも交換され、ひとしきりの話題のブームがそれになる……その一方で、こちらにはこのような確信が湧くのだ。「彼らがやっているD・Qと、僕がやっているD・Qは、別物だからね！」

これはどのようなことを指すかというところ、このことは当時の僕としても抜け目なくわかっていたのではあるが、僕のような性質の人間がそれに没入するとき、その主人公と自分を重ね合わせるような没入の仕方はしない。僕は作中に向けて、そこに起こることを、見届ける人、として、主人公の脇に付き添っているのだ。つまり、同じプログラムがロムカセットに封入されたゲーム・ソフトであっても、それを開き進めていくプレイヤーは個別であるのだから、それに操作される主人公として、同じ筋書きの演目を、それぞれが別キャストで演じている、という状態ができればいい。その別キャストの、別の上演のことについて、「彼らがやっているそれと、僕のやっているそれは、別のだからね！」と確信することは誤りではない。そして遊び手の想像力のうちに展開される劇作と、表面的なゲーム・ソフトのそれに含まれている仕立てのストーリーとは——それが入念に上手く仕立てられた脚本だとしても——まったく別のものだ。

ついでに、僕はここで三十年がかりに、当時からあった「ピコピコ遊び」というような蔑視の仕方について、正当な反撃を立ち上げねばならない。僕自身が実際に触れてきたその劇作の受け皿としてのゲームを、ただそのタイトルのみを言い述べていくだけでも、それは膨大すぎて、きつと聞く側を退屈にへばらせて眠らせてしまうだろう。野山や川べりの水流にも無限の物語をつけて遊ぶ子どもの心が、本当に「ピコピコ遊び」などにこだわっていると思ったのか？ もちろん、僕自身の性質がそのことへ大きく偏っていたことで、僕の得た体験も劇作のそれへ偏ったのではあるが、少なくとも僕自身に関しては、胸を張ってこのように言うことができる。——無数の脚本から、無数の劇作を、想像力のうちに展開してきた。その体験の膨大さは、有益さにおいて無視できないし、今さら余人に追いつかれる物量ではないぞ？ ましてそれが電子的な表示を媒体にするということ、劇作の本質においては何でもないことだ。

薔薇の密集したエンブレムが子供心にも印象づけを起す難波高島屋へ、および次点として予定に組み込まれている心齋橋の大丸へ、品のよい祖母がよく買い物に行った。母親もよくそれに同道した。買い物へ、買うというより耽るという入り込み方をしたがる彼女らにとって、僕はお荷物になるわけだから、すつきりとしたていの良さで、僕は戒橋筋にでもある当時のゲーム・センターに放り込まれた。それは僕にとっては、基地に戻ってきたような居心地のものだ。不良のたまり場、と、四音・四音の言い易さだけで人口に膾炙した当時の言い方は、半ば実際の正鵠を射ていたけれども、まだ幼児だった僕はときおりおもちゃにいじられることはあれ、彼らに何の目くじらも立てさせない存在。ところがこの幼児が彼らよりも高度なプレイと先の面へ進むため、彼らはその意外さに湧き立つてよるこび、僕をよくわからない関係の一員に認めて加えた。僕には何もわからなかったが、ただ、こうしたことは誰をも無邪気によるこぼせるのだということだ

け知り、そのことに長けていることが子供らしい誇りであった。

ゲームといえは、本来はビデオゲームに限らず、球場で開催される野球の試合もゲームであるはずだ。将棋やオセロといった盤上のそれもゲームであるはず。僕はこれらを、体験の上から有効に区分するのに、劇場型のそれと対比して、「競技型」のゲームと呼びたい。劇場型のそれが劇作としてのドラマツルギーを生むとすれば、競技型のそれは競う人間としてのドラマツルギーを生む。両者間に優劣のつけようはありえるはずもなく、せいぜい、競技型のそれは身体や知能を競技的に鍛える付録があり、一方劇場型のほうは、想像力に無限の多彩さをもたらしうる、ということぐらいたらう。僕はその彩りの多さのほうへ惹き付けられる性質だったから……僕はおそらく高校生になる前後に、家庭用のゲーム機を機種へ買い換えることをしなくなっている。それは、一旦それをやりだすと、まったくその劇作のことへばかり、救いがたく没入するからだ。通学路の、帰路でさえ、一日の例外もなくゲーム・センターへ入り浸るといふのに、帰宅してまでそれは、さすがに何かが破綻する。実際、自分の性質にいかげん怯えるようなところがあって、バランス感覚としての自制をしたのだ。もはや笑うしかないこととして、その性質は、現在もまったく衰えず僕自身に続いている。少しでも手をつけると、またその劇作のことへ、寝てもさめても、という状態になる。僕の身近な人間は、そのときの僕の救いがたさを知っているから、もはやそのことの僕については口出しをする気も起こらないという投げ出しぶりだ。

そうして単に、実生活を忘れて深い没入をするという、ふうのことなら、別段珍しくないと思われるかもしれない。けれども言われねばならないのは、いかがわしい空想への耽溺が神経に習慣づいてしまった者のそれと、劇作へ想像力が引きずりこまれていく者のそれとは、まったく別の営為だということだ。近年、すでに指摘も古めかしく聞こえるほど、神経をなでさするだけのそれや、神経を引っかきまわすだけのそれが、サブカルチャーの消耗品として大量に生産されてきた。それに向けて起こる習慣的あるいは逃避的な、中毒を認めさせる没入は、基本的に不活性のものであり、向き合うのに活性を要求される劇作のそれと同質ではない。活性において劇作に没入するそれは、人間をヘトヘトにさせるが、神経中毒の側のそれは、人間をぐだぐだにさせるのみだ。自慰と性交の差について言うのを、燃焼という言葉でおおよそ言い表せることのように、神経中毒のそれは燃焼性を持っていない。近年に起こるいかがわしいサブカルチャーの供給は、燃焼性を持ちたがらない者らへ産業の刃が向けられてのことだと言えらう。

同年代の人間が、劇作へ興味を持ち、また実際にその劇作を手がけていることがあったとして、仮に彼が過去の記憶の中に、劇場型ゲームに劇作の体験を持たなかったという場合、僕はその劇作の人間へ、わずかに慎重な一步の距離を取る。特に、もつとも社会的な調子で、「当時はよく流行ったよね！」と、彼が軽くそれを言う場合、彼がしてきた体験と、僕がしてきた体験には、説明ではなかなか歩み寄れない格差があると感じ、それを踏まえての距離を取るのだ。昭和の末期から平成の初期、およびそれ以降も続いてきた僕の劇作の体験は、一言でいって

そう生易しいものではなかった。遊びではあってもお遊びではなかった。毎日ヘトヘトだった。救いたいことに、その本質的なところ、劇作の体験へ向けてヘトヘトになることを自己の本懐とする面では、僕は三十年何も変わっていないのだ。あるいは別の言い方をすれば、僕は三十年前からこの地点にいた。

まるで宿業のようにそうして生きてきて、現在もなお生き続けている一人の人間として、このように言っておきたい。これまでの経験と、そしてこれからも起こりうる経験について、人間の恋というものは、劇的なところを起こるものだ。ここで言う、劇的な、という言葉が、洗いなおされて鮮烈になることを愉しんでもらいながら、改めて恋が、劇的、などところのみ起こるということを、誰だっで知っているさということへ、結びなおしをしてほしい。恋と劇的なものと結ぶことに何の困難や違和感があるだろうか？ そして本来言うところの、劇的、とは、劇・劇作というそのものへ結ばれてよいものであって、誰だっでその、劇、が起こり、恋も惹き起こしていくことを、自己の生のうち待ち望んでいるところがあるはずだ。こういったことはヒントになる。

もちろん、僕の務めとして、ビデオゲームのことを言っただけでも、そのことは面白がられるべきで、それ以上のことではない。ただ誰しも、そうして時代の中で触れる一々のものについて、「彼らの触れているAと、わたしの触れているAは、別物だからね！」と確信される、個人的な体験があつてよいはずだ。仮に、有名なアーティストAが歌うのを、記録メディアと再生装置を通して聴いたとする。するとそこに、歌われる世界への単なる移入や重ね合わせというのではなしに、Aが歌われる世界への脇に自分が付き添い立ち、すべてを見届けるというやり方Aが出現することがある。このときから、有名なAについての世間の評価や、その感動についての一般的解釈などは、一切の関係を失うのだ。外部の誰にも知りようのないものとして、よく仕立てられた音楽と歌から、劇作を起こすという営為をやり始めている。

だからもし、自分の聴いたAの歌と、他のみんなが聞いているAの歌は、まったく別物の気がする！ と言いつつ若年の誰かがあれば、僕は年長者として、——それはよいところに差し掛かっていることだ、と励ましを申し述べたい。そうして、一般的にも魅力的なAが、それどころではない、かけがえのないAとして結ばれることがあるから、そのことを指して、恋、と呼ぶのだ。そうして劇的なところにのみ、恋は起こるのである。

「劇的なところに恋は起こる／了」

リビドーの仕事、ロータリーをぐるぐる回る

丸の内に勤めていたころ、よくオイといつて後輩の友人を呼び出し、彼はホンダのバイクを乗り回していたものだから、残業で最終電車の無くなったところに鍛冶橋の交差点で待ち合わせた。彼は永代通りを走ってくる。僕はよく言われるようにふてぶてしく待ち受けている。当時の、板橋本町へ帰るのはどうせ速いのでそのまま彼の江東区の寮室へ泊めてもらうのだが、シューエイも閉まっており：（秀英だったか？ 唐揚げ肉のやけに旨い店。現在は無い）、かといってこちらにはイケイケなのだ。帰る時間に帰るなどできない。馬鹿げて若々しいころ。

「帰るぞ、ただし、皇居を一周してから」
「相変わらず、いいところを言いますね」

話は変わるが、そのころ僕は部長に呑みに連れていってもらい、部長がタクシーで帰ったところで、六本木に置き去りにされるのが好きだった。ガーンから来た黒人に、「haha、お前昨日も置き去りにされていなかったか？」と言われる。よく見てるな、チョコレート野郎、haha、みたいなことになって、どうやって帰宅したのかは記憶にない。

初ボータスがただちに、おそろしい速度でスコッチに変換されて飲み干されていったことについて、僕は自分でビビったが、その後輩の友人いわく、「たぶん何百万あっても使い切る日数は同じですよ、九折さんの場合」と言われて、そうかそれはいけないなあ、社会人じゃないなあ、と頭を掻いた。何かこう、歴史書でも読む？ みたいなことを考えたが、さすがに役立たずのことを言ったので、友人も交通標識を見上げて喫煙していた。

深夜の皇居を、半時計廻りに一周する。ウラ行かんかい、と焚き付けるのだが、友人は安全運転だ。オイ三千回転しかしてないぞ、お前の人生はそれだ、三千回転の男。

三千回転の男ですか！ と、友人はしきりにそれを気に入っていた。

皇居の周囲は、どこから見張っているのか知らないが、少しでもふざけて芝生でくつろいでいたりすると、どこからともなくパトロールカーがやってきてしまう。地面にはチリひとつ落ちておらず、堀にも枯葉の一つもない。

昼には安穩さに慣れたスズメがいて、昼食の米粒を指先につけてやると、てんてん、と近寄ってきて指先をつついていく。

ナイト・クルージング！ クルージング！ おらああ！ と、とにかくそうわけのわからないことを、確信をこめて叫び、タンデムからガシガシ彼を肘打ちするのだが、その程度の僕による打撃や叫喚に彼は慣れっこだ。これという反応はない。

何の話をしているかという、リビドーの話で、真夜中の八重洲や丸の内に、バイクが乗り付けているのに、皇居を一周せず帰宅する奴は精神病だということ

だ。河合隼雄の全集をワイヤーで固めて前頭葉をブン殴ることではか治癒しないという。

もし、真夜中に二人乗りのバイクで皇居の周囲をぐるぐる回る、そのことに何の意味が？ と問う人間がいたら、そいつは精神病である。最近、めつきり多い。神戸大学の、文理農学部のカンパスに入ると、よくわからない針葉樹を真ん中においたロータリーがあるとと思うが、本を読みながらぐるぐるつと迂回しようとする、気がつけば何周かしているときがあった。夜中に淡路島コーヒーを買いに行くつもりが、ぐるぐる、回っていることがあった。何によってそうぐるぐるしているかというリビドーのせいである。本を読むなら読む、考えるなら考える、怒りに舌打ちをするならするで、それは全てリビドーが引き込まれたことだった。ナラティブのところを強調して言わせてもらうが、それはおれがやってたことではなくて、リビドーのやってたことだから、おれの責任ではないし、動機や値打ちをおれに訊くべきじゃない。おれは深夜に皇居の周りを二人乗りで回ったりしない。

学生当時、ギャッツビーのブリーチ剤が流行っていたから、最強のそれをストアで買ってきて、ジャンケンで負けた奴が脱色な、ということにした。K君が負けて、すばらしいつやめきの茶髪になった。しかしギャッツビーブリーチは半分方残ったので、もう一回ジャンケンをしようということになって、ジャンケンをしたらまたK君が負けた。もう一度ブリーチをかけると、K君はどこからどう見てもブロンドヘアになった。神々しいしと言えなくなった。彼はそのまま風呂掃除のアルバイトに行った。というエピソードがあるが、この話は本線に何の関係もない。

リビドーといつて、いちいち言わないが、まともな男なら、仕事にリビドーを向けているはずだ。仕事など一ノグラムもやりたくないのだが、そのこととは別に、リビドーは仕事に向かっている。誰も自分の人格で仕事をしているのではない。リビドーが勝手に仕事へ向かうだけだ。そのことは学生でも変わらない。学問でも、部活動でも変わらない。別に学生でも子供でも、ワークといえれば全てワークで収まる。

何を言いたいかというと、男がリビドーによってワークへ没入しているなら、そのリビドーが今度は女性に向けられて、女性として彼に求められて抱かれるということがあったときにも、そこには何の問題も違和感もない、ということだ。生きているんだから当たり前、とも思わないし、男性なんだから当たり前、とさえ思わない。何も思わないまま、ただその人のリビドーの矛先を自分が引き受けるかどうかだけを考える。それを引き受けられれば、女として誇らしいことだと感じられるし、引き受けられないときは、「ごめんね、わたしも女として情けないけど、でもごめんね」ということになる。別に、何の問題も違和感もない。あ

るのは集中力ぐらいいかない。冷静に考えて、仕事に熱意を起こそうとしてる男なんて気持ち悪い。まともな男なら、熱意なんか起こさなくても、リビドーの先つちよが常に仕事を撫で回

しているはずだ。このことは、たとえばこう考えてみればわかりやすい。食事を
するのに、「食事に興味があつて」「それはやはり食事というのは価値のあるもの
だから」「愛と生命の営みとしてそれを確認するためにそれをすべきだと思
っている」「みんなもつと食事に熱意を持とうよ」「みたいなことを言ってい
たら気持ちが悪い。

これと同様に、たとえば男が女に向けて、「セックスに興味があつて」「それ
はやはりセックスというのは価値のあるものだから」「愛と生命の営みとして確
認するためにそれをすべきだと思ふ」「みんなもつとセックスに熱意を持とう
よ」「みたいなことを言っていたら気持ちが悪い。気持ちが悪いのだが、今実際に
そういう男は少なくない。

人間が、食欲によって食事をするとか、性欲によってセックスをするとか、そ
んな話は阿呆らしいスツカスカの話に聞こえる。まともに物事を考える能力を
失った人間の発想だ。食欲によって食事をするとか、性欲によってセックスをす
る人間、それも割とそれに必死になる人間がいたとしたら、その人間は寂しいの
だ。寂しさに押し殺されて、もうすぐる先が食欲とか性欲とか、物欲とか名誉欲
とかしかないのだ。そうした人間は、本当に寂しさによって気が狂っているから
どれだけ笑顔のふうを見せていても、近寄ってはいけない。寂しさは人間を狂わ
せる。本当はそうではないのだが、寂しいということが「負け」のように感じら
れているようなアホは気が狂ってしまう。寂しさについて、正しい教育を与えら
れてこなかった人間はそうなってしまうが、そういう人は結構多い。年寄りのほ
うが多いんじゃないか。このごろ日本ではよく老人が暴力を振るっている。

仕事にリビドーを取り込まれてしまった男が、深夜に一人ででも居残り、煙草
をくわえていてもいいじゃないか、次々に書類をわしづかみにして睨みつける。
気取っているのではなくて、口が半開きになり、視線に異様な集中力がみなぎっ
ている。彼の目には他の人には見えない何かが見えている（ここ重要）。同じ調
子で仕事をしている同士で、冗談を混ぜ込んで大いに笑う。泥酔していても仕事
の新しいideaについて語ろうとする。

その彼が、書類をわしづかみにする動作と、まったく変わらぬ動作で、女のこ
とをわしづかみにして、手元に引き寄せようとするとき、そこには何の違和感も
ない。彼は仕事をもみくちやにし、仕事にもみくちやにされる男だから、女をも
みくちやにすることは、リビドーの行き先として何も不自然ではない。ヘトヘト
になつても無意識に手が書類を掴む動作をするように、ヘトヘトのくせに女を抱
こうとする動作が彼の身体に起こっている。

二人で眠って、女のほうに先に起きて、朝食の準備などしていると、オア
ヨウ、といって男が起きる。煙草を吸い始めるが、もう彼の目には仕事への集中
力とideaが光っているので、朝食の準備をしている女は、それをそっとしてお
こうとする。

これの何がおかしい。別に、男尊女卑ふうになわざわざ書くこともないのだけ
ども。

もつと楽しくいこうじゃないか、お前はバカか。と、この話は何の役にも立た
ないが、全て自分のやる気ちやうんなどではなく、リビドーが引き込まれてのこ
とだ。そうでないからワークに向けてもうさんくさく弱つちくなり、セックスに
ついては動機が不明みたいな禅問答が起る。そうしてリビドーを循環させて生
きていない男は、マティーニで鼻うがいしないと治らない。

皇居のまわりをぐるぐる回る、ナイト・クルージングだといって、意味がある
とかないとか言うとして。よくよく考えよ、

本当に同じところをぐるぐる回っているのはどっちのほうだ？

吾ら、リビドーに営為を直結、エネルギー全て直進であるのに、そこをいつま
でもぐるぐる不毛に循環させているのはいったいどっちのほうなんだ。口を開け
させて下あごを傘立てにしてやろうか。そこに立っている。

興味があるとか、意欲があるとか、そんなことは信じない。たぶん僕は、その
興味とか意欲とか言う奴がいたら、「ゴミだぜウポツ」みたいなことを言うだろ
うが、興味と意欲はそれにどう返答するものなのかお聞かせ願いたいものだ。殴
り合いから帰宅した男性を見て、女性は「残酷だわ」と言った。何かと訊けば、
「違うのよ、そうやって血を流してでも戦う人を前にすると、それ以外の人には
抱かれたくないって気づいちゃう、それですごく残酷。しかも彼、笑っている
し、顔もかっこいいし」ということだった。僕は暴力には反対だがリビドーには
賛成である。

リビドーを循環させたらお肌ツルツルになるよ、という言い方をすれば、もつ
と興味を持つてもらえるだろうか。このご時勢、僕だってそれぐらいの捏造はし
ていい気がする。しかもこれは捏造ではない。冷静に考えて、本来は日々循環す
べきリビドーが、数年単位で便秘を起こしている人間の、肌や顔つきが美しくな
るわけがない。リビドー・コンディションを表明せよ、そして便秘ですと高らかに
叫べ。

リビドーだ、リビドー。情熱では足らず、熱意ではさらに足りない。意欲とか
興味とかは話にもならず、意識を高くしているのは先ほど申し上げたように精神
病だ。リビドーは営みの全てに向かい、その中に女性やセックスのことも含まれ
る。細胞の全てがリビドーだから動作する。もちろん女性の側にもリビドーが
なければそれに正当な呼応ができないわけだけれど、そんな眠たい女性は白亜紀
から現代に至るまで哺乳類の次元として見つかっていないから考えなくていいだ
ろう。リビドーに呼応がない女性なんて凶悪なジョークでしかない。二千回ク
リックして下さいなんて面倒なPCはない。

もしくは、単に体調が悪いんだ。しっかりと休んで、おやすみなさい。あなたに
は良い男性を、やさしい人を。寂しさからくる性欲の狂気乱暴でなく、リビドー
が愛に向かつて死にゆくよく笑う人を。

(あと言ひ忘れていたけれど、ワークにリビドーを向けられない人間が、あなたに
性欲だけを向けてきたとしたら、それはとにかく猛烈に気持ち悪いことで、あな
たの具合はすつと悪くなるけれど、それはあなたのせいではないしあなたの問

題ではないから心配しなくていい)
 「リビドーの仕事、ロータリーをぐるぐる回る／＼」

永遠の生命とかつて少年のバラモン

アークラーからカジュラホーまでの道程は、ひどく縦揺れするバスだったと思う。当地の人々はそんなバスの、屋根の上まで乗車席に使う。振り落とされたいのは外国人から見れば人間業を離れている。

屋根に上るといつても踏みあがる足場がないので、背の低いヒンディーがやってきて、僕の肩を叩くと「ユーハブグッドシヨルダー」と言っただけ。何だ？と僕が首をかきあげていると、連れていかれて……屋根上組が集まってきて列を為し、頼りがいのある頑丈な足場として、バス車のバンパーと僕の肩とを左右の足がかりに踏みあがっていくのだ。次々にという具合に。

「いてて、痛えよ、あと何人だよ」

「大丈夫、ユーのシヨルダーはともストロング」

そんなことが言われたような気がするが、カカカと笑われるとこちらもカカカと笑ってしまう。全て歯についた煙草のヤニと尽きない砂埃の風とに運ばれて消えていってしまった。

多くの足は大半が臭かった。

縦揺れのひどいバスは五時間以上走っただろう。縦揺れは本当にひどくて、座席から天井へ頭をぶつけるぐらいに身体が跳ねる。網棚に載せた荷物は、最前列に置いたはずがいつの間にかずれていつて最後尾に転がっている。そして僕自身驚いたことに、慣れ、というはおそろしいもので、僕はそんなビートウォッシュユ洗濯機の中で、すっかりグースカ眠れるようになっていたのだ。まだガンガー（ガンジス川）にも到着していない、かつてのインド旅行の、当て所ない前編の話である。

紫色の空とエンジ色の要塞アークラー・フォートが、僕を迷子にさせる孤独な夢を見ていた。タージマハルは霊廟である。大理石シンメトリの巨大霊廟を何百年と抱えるアークラー地区は全体が霊的な圧力に満ちているように感じられ、僕は数日でまったく押しつぶされていた。その受け止めなおしを夢の中でしていたと思う。シャワーにさえ使いがたい苦味のひどい水道水、時計の裏に隠れた巨大ヤモリ。運次第で聖人にもなるヒンディーの人々。

バスがカジュラホーに着くと、やはり尽きない砂埃と、今度は無闇な青い空があった。

昨夜僕は渋谷にいた。公園通りから神南一丁目を左折して……中心部より坂上のほうが僕には居心地がいい。坂道が上下にする、物理的な差別が、二十代以降の僕の生に大きな影響づけを与えてきたから。

二〇二〇年以降の目途は立たない。世界経済の進行はより多くの人々に自動車を与えるだろう。そうしたらすぐに大気汚染の問題がやってくる。そこに欧州式の燃費規制が掛かると、日本の自動車産業はひどく不利なことになる。そういったことを教えてくれた、また実際に優秀なビジネスプレイヤーとしてその話の渦中に身を置く友人Tは、僕が丸の内に勤めていたときの同期仲だ。彼もこれから短かからぬ海外駐在へ飛び立つところだが、彼が共連れにする優秀な同僚について、これからどう籠絡し、揃って何を成し遂げようとするのか？ それを後に聞き遂げるだけだとしても期待が高まる。彼は最も賢明な選択としての、思慮の浅さを自己に活用しており、前のめりに鼻息荒くすることが一度もなく、彼の才能から自然発生するポジティブシンキングに身をゆだねることを本懐としている。その点においては、彼は余人の追隨を許さぬ者だ。

Tはしばしば、僕のIQを吸い上げに、やってくる。Tが持つ能力、企業があつたとして、その中ででの調整や建設的な人付き合いを恐るべき速度で加速していくその能力に、僕は生涯を賭しても敵わないと思うけれども、Tから見ても同様に、僕がする、正体不明の智恵へ根を張り広げていくことについては、到底勝ち目が無いと感じている様子なのだ。十数年そうして付き合ってきたわけだ……彼の抜け目のない人格は、一方で、思慮の浅さ、によってゴムマリのようによく弾み、「IQの高い奴と話していると自分のIQも向上するらしい」と仄聞したこととを素直に信じて、僕のところへその、吸い上げにやってくる。ニヤニヤしながら。

つまりは彼としても、救いたいところがあつて、僕のする与太話の、トルストイやブッダやユングにもすぐに接近して語るところの話の珍しさが、彼の、お好み、でもあるわけだ。彼がニヤニヤしてよろこぶのはそれ。僕と彼は救いがたい次元でロマンチストであるというところで通底している。Tの、思慮の浅い、ロマンチストぶりの、可愛らしさの表れについて、周辺にコメントを求めたとしたら、「あいつらしいね」という好感の笑いが返ってくるだろう。

Tと過ごすのに酒無しという事はありえない、呑みにいくのだが、呑めば呑むほどよく笑うし、よく笑うのに合わせて、また互いによく呑むのだ。Tは当然に、大人がする気の利いた物の言い方をよるこぶし、大人の人間が示す生き方直接の熱さに共感し、同時にその周辺に現れるこっけいさの人間について、そこそこ悪い顔をして笑う。嫌味のまったくないそれは、天真爛漫というよりは彼の、思慮の浅い思想、にたくましく裏付けられて、抜け目が無いと感じられるものだ。チク・タクと音の大きい時計が優秀な時計ではありえないように、思慮の深さは多くの場合優秀でもなければ賢明でもない。抜け目のない時計があれば、それは最終的にどれよりも正しい時刻を指し続けているだろう。

呑みながら、笑いながら……進みゆきに、やがて僕は、人間および高等の哺乳類が持つ、主体の現象について語り出した。デカルトを呼び出さずとも、この「わたし」と呼ばれる、誰もが持つ主体の現象。これは個々の人間にとつていつ始まったのだろうか？ 細胞分裂を繰り返して成育していく中の、どの時点で。そしてそれはどのような化学的成分で形成されていると言えるのか。

完璧な生命維持装置をつけた上で、人体を上下に切断するとする。そのとき、人間は「下半身を失う」と感じる。それは「わたし」が人体のうち上半身に依拠しているからだ。これはわかりやすいが、では同じ条件で、人体を左右に切断したときはどうなるのか？ 「わたし」なる主体は、人体の左右のうち、左か右かどちらに依拠するのだろうか。そもそも、人間を上下に切断するのだから、千枚にスライスしたとしたら、その何枚目に「わたし」が宿っているのか？

これらのことを考えてゆくと、「わたし」なる主体の現象が、果たして肉体としての生命に本当に依拠しているのかどうか、疑わしくなってくる。ひいては、やがて来る肉体の死があつたとして、その死をもって「わたし」なる主体の消失を保証はできなくなってくるのだ。よく言われる、がさつな言い方の、「死んだらオワリ」「無になる」というやつ。別に宗教を根拠にしなくても、これががさつな言い方に反駁するのは論理上の演繹で十分だといえる。

「長い間、この肉体が、イコール、わたし、だ」という暮らしをして、それに慣れきっているからね。けれどもその習慣をもって、死んだらオワリ、主体の現象が消失するというのは、理知としてナゲヤリだ」

このナゲヤリという言い方がTに気に入られたもよう。彼は自己の内に問い重ねられる珍しい思索に難渋し、その難渋ぶりに顔をしかめてよろこんでいた。まったく彼は、このような顔をするために酒を呑んでいるに違いない。

「いやあ……このようなね。このような、脳みそをギューと絞られるこの感じ！ この感じだけは、お前と話すときより他にないんだよ。このような、持つて帰ろうという話、そして何かこう、これからに役立てようという強い思いがする話は、お前と話しているときより他にないんだよな！」

マイクロ・マクロで仕事をし、そこに精密な仕事ぶりも鷹揚な舵取りぶりも積み重ねていく人間がいながら、渋谷で安くはない焼酎を割って呑みながら、恵まれた個室と座席でくつろぎ笑い、思いがけずこのような話が尽くされている。もし互いに必要な、ひらめき、へ干渉し合えるのなら、その関係は友人と呼んでよいだろう。

僕は昔話として、旅の道中、カジュラホーで体験した、テラスレストランで的一幕のことを話した。店の名前はブルースカイレストランだったか？ 忘れた、登場人物などは全てムハンマドでよい。細かな性交の彫刻で全体を装飾された、土作りの神殿を抱くカジュラホーは小さな町だ。

少年がいて、壮年がいた。日本人の僕がいて、もう一人見知らぬ日本人がいた。四人がまちまちに一つのテーブルについていた。利発で活発な少年が、物怖じしない快活さで尋ねた。僕にはなくもう一人の青年に向けて。

「この町までどうやってきた？ by train? / 電車かい。 by bus? / バスカい？」

内気勝ちに見えた青年は口ごもって答えるタイミングが遅れた。それで僕は聞いかけを足した。

「……on foot? / 徒歩かい？」

これを受けて少年はゲラゲラ笑った。

「わははは！ 歩いてかい？ そしたら、彼はたいしたサドゥー（苦行者）だ！」

少年はカッと笑いを痛快に切ったあとで、よろこんで身体を前傾に起こして、手を伸ばして僕のストロングな肩をパシッとはたいした。その手はそのまま青空の下、テラス席での握手に差し出されたわけだ。滑らかな手に、よろこびから力の強い握手。

まちまちだった四人は、それぞれの個性のまま、一つの向き合い方へ収斂されていった。四人は四人とも、笑いながら話しながら、カジュラホーの空が赤く暮れていくのに、まかせて身を染ませていったのだった。

十六歳の少年、

「僕はバラモンだからね、教師になるんだ！」

当時二十五歳だった僕、

「それにしてもお前ら、インド人は面白い奴らだな」

壮年のインド人、

「それは違うクーヤ、それは違うんだ」

「おれとお前、おれたちとお前だから、面白いんだ。そうだろう？」

「ツーリストはたくさんくるさ。彼らがどんな奴らかはおれだってよく知っている。そこで、おれは思うのだけれどね、クーヤ。自分の国で通用しない奴が、インドに来たって、そりゃあ通用しないさ。お前はそんな奴じゃない。お前は、自分の国で通用しなくて、逃げ込んできた奴とは違う。そんなことは、日本人？ インド人？ そんなこと関係なしにわかるものさ」

引き受けて僕、

「そのとおりだ」

十六歳の少年、

「おれにも言いたいことがあるよ。なあクーヤ、誰も彼も、明日のことを考えるじゃないか。明日のことを考えるから、今日が楽しめない。今日が消えてしま

うんだ。それって愚かなことじゃないか？」

引き受けて僕、

「そのとおりだ。まったくそのとおりだ」

「明日なんて放っておいても来るというのにな！」

十六歳の少年、

「僕はこんなに話が合ったことは生まれて初めてだよ」

そのとき僕は、遠い異国の少年が、当時の僕とまったく——完璧と言ってよいほどに——同じことを考えていたことに驚いた。驚きながら、同時に、当然だという気もしたのだ。大いに笑いながら……明日のことなど考えなくてもよい。明日なんか放っておいても来るものだ。そのとき誰もが高らかに笑い得たのは、何しろカジュラホーの、天井さえない夕暮れの下で、明日などというものに現実味などありえようもなかったから。

そういったことは現在も続いている。あのころよりはいくらか複雑にはなつたにせよ、やはり明日は放っておいてもやってくるもので、今日中に明日は来ない。そのことはいかにも、説明したくないならないうつながら方で、人間の理性的主体の

「わたし」が、肉体の滅亡によっては消失しないということとつながっている。

もし、人間が、「死んだらオワリ」というようなもので、それ以外のことを信ぜず、何も感じもしないということなら、僕とTはこれほどまでに友人でありえただろうか。同様に、異国の利発な十六歳のバラモンとも、出会ったときから友人でありえただろうか。そうではない、そうではない、という破壊、ばかり湧く。

もし世界が、がさつに言われるそれのように無味乾燥なものだったとしたら、何がTの脳みそをギューとしていた？ かつての少年のバラモンと干渉しあつて確かめあつたひらめきを、現在の僕が今なお持ち帰ってきたまま所有しているし、Tも焼酎の酔いごとギューとくるひらめきを持ち帰って役立てようとしている。

僕がTに向けて話したことをそのままに言うと、

「ブツダにせよトルストイにせよ、死んだらオワリなんて言っていない。その正反対を言っている。さあ、彼ら大天才に比較して、凡人がガサツに思いつくことを、決め付けたふう信用してよいものかね？ おれにはそれが、度を過ぎた不遜に思えるんだね……」

その後何があつたか。ハードシップを含む海外駐在に改めて向かう彼を、駅前を送り出し、当然のように差し出された手へ握手をした。彼の賢明さである思慮の浅さと、ロマンチストぶりの好いところが活躍する。滑らかな手に、よろこびから力の強い握手。場所はカジュラホーからハチ公前とずいぶん変わったが、僕は永遠じみてそういう今日を繰り返している。それにしてもニヤニヤしながら。

「永遠の生命とかつて少年のバラモン了」

Ceu de Azul no Brazil, 笑顔でいることが大切 です

記録によると、2005, Sept. であるから、今からちょうど九年前に、僕は東京の西部に、「スペシヤル」に会いに行っている。会うといっても一方的なもので……：たまたま会ったように感じているのは、その会場が賑わってにわかには野天のサイン会場のようになつたからだ。僕は手持ちの書籍と、それなりに使い込んだ万年筆を手渡しして、典型的なミイ・ハアの気持ちで、彼にシグネチャーを乞うた。「スペシヤル」は、真つ先に、ペン先の感触について、「素晴らしいペンですなえ！」と発見を愉快そうに、間違いのありえない確信を込めて言われて、僕を内心によろこばせたけれども、そうして金ペンの万年筆を使い込みはじめたのも、他ではないその「スペシヤル」からの影響によるのだ。彼が、あまりに万年筆のペン先についてのよさを変態的に言い続けるものだから……：そのことは、タイミングとして言い出せなかった。周囲は、同じミイ・ハアの気持ちでいる人々で、こつた返していたから。

そのときの、青インクで書き付けられたシグネチャーがこうある。「スペシヤル」の、自身の名前こそをむしろ脇に添える程度のものでして、どこかしら雄大な書き方を感じさせる文字の形があらわれている。

“Ceu de Azul no Brazil, 2005, Sept.”

雄大な書き方の文字は、これまでに何度も、スペリングを僕に「Geなのか、それとも、Ceuなのか？」「Cuiはceなのか、翻訳に出てこないが？」と誤解させてきた。Brazilはかつての英語圏で主流だったスペリングらしく、現在はBrazilの綴りが主流のようだ。最近になって、インターネット上の翻訳装置のCGIが、Ceu de Azul no Brazilと入力した原文に対して和訳を正しく吐き出してきて、僕はようやくフーとため息をついて、このシグネチャーとの付き合いを正統にすることが出来ている。

とはいえ、こうしてシグネチャーにあらわされた文言が、これまで何を言っているのかわからないということではなかった。それどころか、なぜかそれらの言葉の連なりを見た瞬間、あるいはそれが書かれてゆく途中にも、それは見えて何のことも書きあらわしているのか、僕には直接に理解されたのである。

「ブラジルの青い空」

その文言への直接の理解は、今振り返れば日常の体験をいささか逸脱しているように思う。ポルトガル語への知識が一切無い僕が、何によってその「ブラジルの青い空」を確認したのか？ 結局のところ遡れる理由はない。

このことに係わって、僕はこれまでに何度か、「ポルトガル語には、ブラジルの青い空」と言い表す慣用語があるらしいよ。

それだけ特別な青色が、当地の空にはあるってことなんだろうな！」と、うれしそうに人に語ったことがあるはず。今になって別の青色で顔を悪くするところ、この慣用語の実在について、実は引き当たる証拠の記憶がないのだ。あるいは、記憶しかない、という言い方が正しかろうか？

何かでそう読んだはずだ、と、確信されているのだが……：現在の僕は、そうした記憶の取り違えが、むしろ肯定しうるものとして、人間にいくらでも起こりうることを知っている。自己が瞬間的に発明した文言や物語を、過去に体験から確認した何かと完全に信じ込むことがあるのだ。それも、日常的には信じがたいような、深く、無邪気な現象として、それは起こることがある。

幼い頃、近隣を走り回るのにもいちいち冒険がつきまといつていた中、或る日のこと。僕は夕暮れに、冒険の果て、完璧な遊び場としかいえない、広い秘密の野原を見つけて帰ってきた。そこで新しい同年代の、とてもすてきな、静かであたたかで気分よい友人たちも見つけてきたという。僕は帰宅するなり母親の背中へ、にぎやかな声でそのことを語ったはず。その湧き立つような母の体験のまま、鼻息を荒くして寝床に就き、翌朝には飛び起きて、クツを履いて家を飛び出すのだが、門を出たところで足がガクンとなつて止まる。完璧な遊び場のそこへの、行き方がわからないのだ。大きく見て、向こうの方角だったはず、というのわかる。しかしそちらの方角は、すでに冒険されつくして、隅々まで知られてしまっているエリアへの方向なのだ。

行き方がわからなくて、やがて胸が詰まってきた、苦しくて泣き出し、それでも昨日のあそこへたどり着こうとして必死に歩き回る。そういつた経験は、かつて誰にでもあつたのではないか。数年が過ぎてから、今度は自転車に乗って、あのときの遊び場はどこだったのだろうか？ という、今度はただ謎を解こうとする気持ちから、調査に走り回るのだが、やはり幼子の移動圏内にはそのような広さの完璧の野原などありえないことが確認されるのみ。

こういったことが、純然たる想像力の体験でしかなかったとしたら？ その景色の体験はともかく、確かに血が通って感じられた、あの友人の手指との握手は一体何だったのだ。あれまでが幻想だったとは到底信じられない……：その握手の感触はあまりにも具体的に残りすぎている。そのことまでを含めれば、想像力の体験というのも、一種のそら恐ろしさまでがつきまといつてくるのだ。想像力がその気を出せば、無限の現実を作り出すことなどお茶の子さいさいで、今あるこの現実、というのも、想像力における最低限の共有か何か、その程度のものでしかないのではないか？

僕がこれまでに最も大きな影響づけを受けたであろう、大江健三郎の「新しい人よ眼ざめよ」についてさえ、僕は今でも冗談混じりにこう言う。当中で最も深く影響づけを受けた詩句はこうだ……：「鎖につながれたる魂をして、緑の野に走り出でさしめよ。」……：どうだ、完璧な詩句だろう？ しかし立ち戻って当の詩句を文中に探してみると、見つからないのだ。ブレイクの詩篇アメリカ・ア・プロフェシーを大江が訳した文中から、想像力の体験をした僕が、勝手に編纂を

し、さらには飛び越えた、発明、をしている。

参考までに元の詩文はこうなっている。

「粉碾き臼を廻している奴隷をして、野原に走りいでしめよ。／空を見上げしめ、輝かしい大気のなか笑い声をあげしめよ。／暗闇と嘆きのうちに閉じこめられ、三十年の疲れにみちた日々、／その顔には一瞬の微笑をも見ることのなかった、鎖につながれたる魂をして、立ちあがらしめよ、まなざしをあげしめよ。
(Let the slave grinding at the mill, run out into the field; / Let him look up into the heavens & laugh in the bright air; / Let the inclined soul shut up in darkness and in sighing, / Whose face has never seen a smile in thirty weary years; Rise and look out.)

粉碾き臼を廻している奴隷……スレイブ・トウ・ザ・グラインド。それは、「ただちに上演禁止になったんだよ」と音楽の教授が語ったカルミナ・ブラーナの冒頭シーンにも結び付けられている。そのような、「鎖につながれたる魂」。これが三十年の疲れにみちた閉じ込めの暗さから、立ちあがり、明るい野原に駆け出してくる。その明るい、野原、そのものを、僕の想像力があまりにも明視してしまつたため、それを僕自身が「緑の野」と呼ばざるを得なくなつたに違いない。幼い頃、僕が確かに、完璧な遊び場、へ行つたのだと言ふより、僕が、僕が読んだ「新しい人よ眼ざめよ」にも、やはり確かにこう書かれてあつたと言ふより、ないのだ。「鎖につながれたる魂をして、緑の野に走り出でしめよ」。今のときでさえ、引用した文中にこの文言がないのが、不思議で間違つていふという違和感がしてしようがない！

Ceu de Azul no Brazil, 1)の文言が、「ブラジルの青い空」を意味する慣用句だということも、同様の手続きによるもの。慣用句への確信は、同時に、当地にそういう青空が実在することへの確信でもあるし、僕ならばその青空を目撃することができるといふことへの確信でもある。

さて、未だ引越しに際しての荷解きが完了しておらず、ダンボール箱へ押し込んだままになつていた蔵書のうちから、偶然引つ張り出されて今の手元にある、このシグネチャー入りの本。「どこ吹く風」という題のそれ。この本を手がかりにして、ようやく僕はこの一箇月の難渋を解決された受け止めなおしに結びなおすことができたのだつた。

英国ロイヤルバレエ団から離脱しての、新しい試みをしてゆくアリーナ・コジョカルと、彼女を押し立てて支え励ましもする、僕からは詳しくなれようもな

い一味。彼らのする日本公演としてのひとつが、二〇一四年のドリーム・プロジェクトと冠されたそれだったわけだったが、実際に僕が座席にうずまりこんで目撃したとき、それは五反田公演の楽日だった。楽日に合わせて、本編のあとにトーク・イベントが特設される運びがある。それで、閉幕しても場内から期待の気圧は下がらずに残つていた。

場内はあらためて、いわゆるバレエ・ダンスの、関係者、ばかりなのだということも浮き上がったようにも感じられた。化粧と服装の具合、および、特に首筋が長くグツと姿勢がよい少女たちの点在が客席にあつた。

すでに本編の役割を終えて閉幕した舞台の上に、改めて当日のバレエ・ダンサーたちが現れた。拍手で迎えられ、並べただけの丈の高いスツールにそれぞれが腰掛けてゆくと、彼らがいかに優れた体躯の持ち主であるかが際立つて見える。それぞれ、よく似合う上等な服を着ていた。彼らは普段としての微笑み方を恢復させて見せる。

トーク・イベントを進行する司会者は、派手ではないが円熟しており、距離感について好ましい厳しさを持ちながら、ほがらかに、上手にそれを進行することができた。聴衆は彼の味方であつたし、彼もまた聴衆およびバレエ・ダンサーたちの味方であつた。アンケート用紙に集められた質問のいくつかを司会者としての声で投げかけると、肉體表現を本業にするバレエ・ダンサーたちは、思いがけず熱心に、理的に、明晰に、的を射た話を返したし、合間にユーモアを挟んで聞き手をなごませ笑わせることもした。ただ抜群によい体躯をもつた賢い青年たちというだけに彼らには見える。彼らが思いがけず熱心に語るので、その熱気を受けた司会者は、

「さて、あまり多くの質問にお答えいただくことはできないかもしれませんが」と嬉しがる声で言いました。

そうして、トーク・イベントが好ましく実り、進行していく途中で、アリーナ・コジョカルが気配もなく壇上に現れた。飲みかけの、コカ・コーラの赤い缶を手を持って。赤い缶は、ただちに聴衆に注目され、すぐさま、それほどの急激な燃焼と、当然必要な補給があるのだ、という納得のされ方を代弁するシンボルとなつた。よく編みこまれたやわらかい生地、よく似合う服装そのものより、足元に置かれてときおり口付けされるコカ・コーラに、ウズウズする印象を受けなかつた聴衆はこのときあるまい。

全体の進行において、それぞれの順序やタイミングについても、したたかな狙いを持つているであろう円熟の司会者は、ちようどよいところを見計らつて、コジョカルへの、視認性が高いというべきの、大胆なところの質問を読み上げた。質問の主は幼い少女で、その少女が懂れにまみれていることまで含めて、司会者はそれを達者に読み上げてみせる。

「コジョカルさん。どうやったなら、そんなにかわいく踊れるのですか？」

場内が同意の勢いでドツと笑いに沸いた。通訳がコジョカルに耳打ちすると、コジョカルは赤くなつた。コジョカルは、押し付けられた回答用のマイクを持って

余し、それを隣にいる、パートナーであるコボーに押し付けることを思いついたようだった。そうしてマイクがぐいぐい、押し付けられようとすると、今度はコボーが驚いて、

「いやいや！ おれには何も言えないよ！」

と忙しく両手をギブアップの形に振りかざした。断じてマイクを受け取りはすまいというやり方に、再び場内は好ましい笑い声を上げる。

しょうがなく、コジョカルは、向けられた質問に、自分なりに答えようとするしかない。

けれども……そうして人をはにかませるムードのものは、コジョカルが

「…….uh..と、彼女のこれまでしてきた取り組み方の実際へ、思索を深めてゆくとき、ただちに真剣味を帯びていって変質し、場内は次第に水を打ったように静まり返っていった。」

それで、静謐の中で言われたのがこうだ。残念ながら、僕の語学力では通訳を経てしか全体を聞き取りえない。

「笑顔でいることが大切です。そして、出会いをどう力にしてゆけるかです」

ここでこうして語られた言葉が、その後の僕の一ヶ月間を難渋に苦しませる。「笑顔でいることが大切です」。確かに、舞台で観るコジョカルの踊りは、全身そのものが、笑っているように見えた。それは理解しうるにしても、では自分の直接のこととして、「笑顔でいることが大切です」とは何のことか？ もちろん、表情筋に笑顔グセをつけるだけの投げやりな、営業マンの技法じみたそれでは、コジョカルの言ったことへの本意に添わないのは明らかだ。そうした笑顔の濫造はむしろ、最も「笑顔でいることを大切にしたい」と言いうるだろう。そんなことはわかりきっている。何しろ、静謐の中で、「笑顔でいることが大切です。そして、出会いをどう力にしてゆけるかです」と、コジョカルが、半笑い、で言ったわけではないのだから。

笑顔のことと、出会いのこと。このことは、平易で、無益でない発見を、僕に一つもたらしてくれたように思う。これまでに出会った人のことを思い返すと、驚いたことに、誰についても、その記憶はその人の笑った顔を中心にして形成されているのだ。いくつもの表情や姿のうち、特に座って笑っている顔の、「その人はどう笑ったか」ということの受け止めが、その人についての定義づけ、その中枢になっている。逆に、さんざん知り合っているはずなのに、この人とは「出会った」と呼びうる感觸がないというとき、やはり記憶の中には彼の「どう笑ったか」ということの残像がない。出会いは笑顔を中心に構造化して受け止められているのだ。たとえば、「家」という建造物の受け止めが、居間を中心にして定義づけられていることのように。この僕の発見がもし正しかったとしたら、アリーナ・コジョカルの踊りが、観衆に出会いと、それに引き続く失恋を与えるということも必然であるわけなのだ。全身そのものが、笑っているように見える踊り。観衆は、バレエへの含蓄を気取りながら、いつの間にか、彼女がどう踊ったかではなく、どう笑ったかを目撃してしまっているわけだから……

ひとまずは、この発見への結びつけをもって、一つの話としての、まとめあげとしてよいとも、一度は思われた。しかし実際にそうしてみたところ、難渋はごまかされたのみで、解決はしなかった。自分はこの書き方、まとめ方で、笑顔、でいることができるものかね？ そう問いたですと答えは否において明白であったから。だからますます難渋は深まっていった。真夜中にも、ダンボール箱を引き倒して、中身を混ぜ返したりしていたのは、その難渋に行き詰まったことだったのだ。その難渋のせいで、大切にしていた「どこ吹く風」の、オマケについてくる本のオビに、ビリリと裂け目が入ってしまったけれど。

想像力が勝手な編纂をすることはすでに述べた。場内の暗闇を、スポットライトの閃光が切り裂く先に、コジョカルは白鳥の姿をしていた。閃光に水の微粒子が無数に浮き上がっていたから、そこは鬱蒼とした森の奥かどこかなのだ。そこから「…….uh..」となって、語られたことについて、それをコジョカルが言ったのか、オデット、が言ったのか、区別したがるヤボテンはさすがにあるまい？ 特にそれがコジョカルのことについてであれば、コジョカルとオデットを区別することはほとんど無意味だ。

「笑顔でいることが大切です。そして、出会いをどう力にしてゆけるかです」

「どこ吹く風」は、著者がこれまでにした実体験をそれぞれ小編にしてまとめられているものがある。91頁から97頁にかけて語られるのみのそれを、驚いたことに、僕はこれまで何度も読み返してきたのに、青インクで書き足されたシグネチャーの *Cou de Azul no Brazil* に結びなおして読むことをしてきていない。これまで一度も。今ようやく、記録された日付に遡って、九年ぶりにそのことへ導かれなおしたといえる。

小題「ブラジルの青い空」は、出会いと笑いについてを描き出している。サンパウロにて、ボン・ディア、トゥド・ベン？ 当地の挨拶の言葉が、徹夜明けでくたびれた守衛仕事の男たちを、仏頂面から笑顔へパツと変えることの愉快さから語りだしは始まる。

伴侶を失った悲嘆から、酒および薬物へと引きずり込まれていた女性・エウニセ。解決しようのない苦しみの仕組みから、彼女を救済したのは、痛烈な愛情をぶつけにきた、彼女の幼い娘だった。幼い娘は荒れ狂うエウニセに、ついに頬を殴られた。打撃に打ちのめされたところ、娘は……パツと起き上がった。そしてエウニセに向かってきて、小さな手でエウニセの頬を……挟んで……「ママイ、笑って」と訴えた。その真剣さは恐慌の中にあるエウニセをさえ怯ませ、涙を流させたという。

以下、「ブラジルの青い空」の末尾部の引用。

「よかったね、エウニセ」

「ええ」

「娘さん、今じゃ小学生だ」

「笑うっていいですね」

「悲しかったら笑うんだ」

「あなたを見ると、この話、聞いてもらいたくなかったです。聞いてくれてありがとう」

「こちらこそありがとう」

私たちは握手をした。

外に出る。両手を広げ深呼吸をした。

空は晴れていて、深い深い青が広がっていた。ブラジルの青（アズール）。大陸の笑顔みたいな青だった。

「スペシャルの、悲しかったら笑うんだ、という励ましの説得力はもとより、そもそも、Ceu de Azul no Brazil、のシグネチャーに書かれた「ブラジルの青い空」とは、この本の見開きに重ねて書きさされる上で、何と結ばれるべきだったのか？ 言わずもがな、「大陸の笑顔みたいな青」。僕はこうして、九年ぶりのやりのこしへ、今になって導かれ、引き戻されにきたわけだ。

幼い頃の、完璧な遊び場、に重ねるようにして、ブラジルの青い空という慣用語は、それが特別に成立する青空ともども、実在する、と言うよりないわけだし、同様に、白鳥の姿をしてオデットが語る「笑顔でいることが大切です」ということも、特別に成立する実在があると認めてよい。なるほど、笑顔でいることを大切にするといつて、青い空を青い塗料の散布によって成り立たせようとする人間はありえないわけだ。大切ということは、作為に汚さないということでもあるから。

Ceu de Azul no Brazilにせよ、笑顔でいることが大切ですが、完璧な遊び場と同じくして、明日にはふと「行き方がわからない」ということにはなったりする。けれども、そうして行き方や実在に再現性が得られないからといって、それらの体験を、自己の信じてよい体験としてはならない……というわけではないのだ。コジョカルは笑顔主義を推奨したのではなくて、あの青空が大切だわ、というように、普遍のことを言ったのみ。および、出会いもそのようなことだと重ねて言っただけに過ぎない。

そして、わたしたちの誰であつてもだ……たとえ、スペシャル、ではなくて、このところ曇りが続く空模様の誰かであつたとしても、「あの青空が大切だわ」というようなことをただ言うだけのことに、何の禁止や咎め、憚りを気にしなくともならないようなことがあるだろうか。「Ceu de Azul no Brazil、」笑顔でいることが大切です。こういつたことを、言つてはならない複雑ぶつた事情など、はたして人間にあつてたまるものだろうか？ たとえ粉碾き臼への三十年の閉じ込めがあり、そこに疲れにみちた奴隷があるとしても、彼を、鎖につながれたる魂、たらしめているのは？ そのことそのものによろしいのではないのだ。笑え！

「Ceu de Azul no Brazil、 笑顔でいることが大切です」

わたしからあなたへの芸術理論

現在は改善されているであろう、かつての油ぎつた天王寺の歩道橋群、これらを構造化に捉えて歩き渡ることができるようになれば、人々はユーゴー書店という、文豪の名を冠した縦長のビルにたどり着くことができた。現在は閉店してしまい、八十三年続いた書店の営業する姿は失われてしまっている。かつて僕が十八のときここで手にした、赤い表紙の心理学の本、確か「カウンセリング入門」と書かれたそれは、当時の僕にショックを与え、後に大学に入學した僕を、真つ先にフロイトの全集を読破することへ導いている。赤い表紙の、手元にもさしたる厚みはないそれは、好奇心の読み手に向けて豆知識をひけらかした本ではなく、臨床の実例を語りこんで理論と血肉とを結びとうとする、思想的でない実地の誠実さがあらわされた本だった。人間の、心、が、カウンセリングルームの周辺でどのような姿を垣間見せるか？ そこには「このようなことに人間がのめりこむことは何もおかしくない」と直接に感じさせるものが書き出されてあつた。

それからまた十数年が経つた。僕は大学院の心理学部の実態に同意しかねる感触だったので進学はせず、またその頃には僕は別のことで自分なりにテンヤワンのやでもあつたし……という十数年を過ごしたのだけれども、やはり今度は赤い表紙の別の本が、今になってしつこく手元にあるのではある。岩波新書、大江健三郎の著した「新しい文学のために」。ロシア・フォルマリズムのうちシクロフスキーの指摘する異化／オストラニエーニエへの入念な切り口から、明視、パフチンの言うグロテスクリアリズムのこと、そしてウイリアム・ブレイクやガストン・パシユラルにまたがる想像力論によつて、この本は、技師的になりすぎないよう、配慮された上で、文学及び芸術の作られ方・受け取られ方を適切に書き表している。僕は当然、数年間にわたつてこの本をいじくり回しているわけだが、今や正しい言い方をするなら、この本の側が僕の数年間をいじくり回したと言ふべきだろう。

一方、ここで話が飛ぶ。そうして一冊の本から芸術理論を獲得し、それも強く影響づけを受けた上での「わたしの芸術理論」として獲得していくことがあつたにせよ、もちろん、人はそのようなことだけで生きてはいない。少なくとも僕はそのようなことだけで生きてきたわけではなかったし、僕自身に影響づけを与えたものはこれまで他にいくつでもあつた。直接に触れた人間のこと、その土の上にあつた笑いのことや、出会いのこと。もちろん異性のこと、セックスのことも含める。時空が消し飛んで止まるような夜があつた。

ビデオゲーム周辺の体験を僕は自分で軽蔑しないということも先に話したまままだ。僕は、映画を、本数を増やして観るマニアではないけれども、これという映画に出会うと、その作中にしばらく棲むふうになるし、引きずり込まれて繰り返して観る。神戸の山麓で毎晩泥酔して過ごした友人たちとの時間のことや、指

揮棒をどう振るかのバトン・テクニクに肉体が憑依された日のこと、あるいはヘヴィ・メタルの音楽が洪水のように仕掛けてくるアポカリプス・デカダンスのこと。スレイヴ・トゥ・ザ・グラインド、ウエイステイキング・プレシヤス・タイム、ブレイキング・ザ・ロウ……これらのメッセージが若い人間に鮮烈に与える影響づけのことなど。これらは、高邁な芸術理論のよく捉えている範囲にない。

あるいは単純に言って「青春」のことなどどうだ？ 大江の赤い本に導かれて知った崇高で精密な芸術理論も、完璧なようでありながら、ともすれば「青春」という一言をすら切実に書き表すことができない。多くの人が実体験から認めるどころ、青春こそが人間にとって最も切実な想像力の期間であり、さらに言えばそれ以降にはもう切実な想像力の時間などありはしないかもしれないのに、この貴重なことへ文学や芸術がしよせん無力だというのは何たることだろうか？

たとえば、ポップス・バンドの「いきものがかり」を、歌う詩人と捉えて、詩人ウイリアム・ブレイクと並べたとする。すると、どうしてもブレイクのほうが莊重に思える。けれどもそれはジャンルの違いでしかないのではないか。実際、「青春」を想像力に現成せしめて洗いなおせと言われたとき、そのことに直接有能なのはどちらなのか。

僕に近い人は、これまでに何度も、僕が次のように言うのを聞かされては

「文学っていうのは、なにかい、変態の特権、なのか？ そんなみじめな優越感に閉じこもりあそばしているのか？」

「桑田佳祐に恋人を見る女はまともだと思うが、大江健三郎に恋人を見る女はいないだろうし、もしいたとしても、おれは付き合いはごめんこうむるね」

「どの文学者も、マイケルジャクソンやジェームスブラウンのことを言わないずつと本だけ読んでやがる。三島由紀夫が映画サタデーナイトフィーバーを観たらどう思うだろう？ あるいは、チャールズ・リンドバーグがニューヨークで数千億の紙吹雪を受けたあのパレードの日のことは？ 文学者は全てを放ったらかしなのか？」

文学と言えば、根暗で変人、結局精神的に信用のおけない何か、という印象があるが、残念ながらその印象は現在のところ完全に正しい。極端な言い方をすれば、僕は歴史上も含めたいわゆる文豪の実像について、「声ちっさ」と言いたくなる衝動がある。「何ボソボソ言うてんの？」。文学を突き詰めた成れの果てがああいう「気難しい地味なミイラ」なのか。もっと、人間としての単純な躍動感とかは無いものなのかね、自ら、想像力活性の担い手、などと称するならば、

「想像力活性の担い手、いやいや、もし非科学的にでも、文豪たちを、合コンの席に並べることができたならば、相手をする女の子たちは猛烈に退屈するだろう。何しろ「声ちっさ」なのだから。」

人間を、そうした退屈ぶりに追いやるだけの、つまりは青春からぐんぐん遠ざかるだけの、ひ弱さへの支援装置でしかないのだとしたら、文学など何も威張れる立場にはないし、尊厳を主張できる値打ちさえない。生まれつきひどいザコ

——わかりやすく言って——に向けては、救済ふうの何かになるのかもしれないが、ザコにとって本当の救済はそうではない。ザコへの真の救済は、彼がザコでなくなることだ。誰だって、「声ちっさ」を脱却したくてもがいているというのに。小説「金閣寺」で主人公は最終的に金閣寺を放火するが、放火したってそんなものザコはザコのままでしかない。

そりゃあ人間は、そう書かれている文章を読めば、その作中に没入して、作中世界に共感する体験をするものだが、そこに起こる「励まし」、それは、そのようなものでも本当によいのか。人間の生を励ます、などご立派なことを言うなら、人間が実際にどのような励ましを必要としているかを真剣に見つめる必要がある。ひ弱なザコに共感することで得られる励ましは本当に必要とされている励ましか。違うだろう。ザコでなくならないと望む人間にとって、必要な励ましは、ザコでない人間に共感することではいか得られてこない。その点、エミネム、のほうがいい人間に共感しているのではないか？ おそらく時間軸上、「芥川龍之介がスライ・ストーンを聴いて、お歌が上手、とほざいたと言う」、このことは事実になり立たないだろうが、この架空の揶揄が指摘するところに心当たりのない人はいない……

おそらく、全世界的に、たしなみとしての音楽から思想的なロック・ポップスが出現して、世界を塗り替えていったあの時代の、歴史的な変化に、文学はついていくことができなかった。文学は引きこもって、自分勝手に悲愴感を一人でいじり続けた。「ハイウェイ・スター」が歌われることを無視して、引き続き主人公をどもらせてその足にびっこを引かせた。「ワン・ショット・アット・グロリー」が歌われているのに、引き続き主人公は戦場の泥濘に倒れて空を眺めてはとぼけた述懐をするようなことを続けた。結果、文学には何のロック性もない。ロックを否定してやめさせようとする憐れなジジイの匂いはびこるものになつてしまった。Beats.

もちろん例外はあるもので、例外の第一人者は、文学ではないが、岡本太郎だ。岡本太郎は、芸術は人間が自由でありえたとき、その証拠として産出されるものだとした。そしてその営みの理由は、歓喜だと説いた。その自由からの歓喜の体験は、実感として爆発的なものだから、「芸術は爆発だ」と言った。人をギョツとさせるもの、呪術的なもの、縄文式のようなもの……岡本太郎の自由と歓喜はそのような産物を証拠品としてもたらした。人間はキレイなものに気をよくするので、そうしたものに媚びることが人間の不自由だと、岡本太郎はおキレイなものを否定し続けた。

この岡本太郎式の芸術理論は、現代に至る——現代にはそれさえも失われつつあるが、さておき——ロック・ポップスの精華に追随することができる。「ハイウェイ・スター」に歌われていることの本質が、自由と歓喜だということには違和感がない。「ワン・ショット・アット・グロリー」の、題名にも滲む銃弾と砲火と血なまぐさい死の予感、人をギョツとさせるものに足りるだろう。

渋谷駅の接続通路には補修された岡本太郎の「明日への神話」が飾られている

が、ピカソのゲルニカを思わせるこれなど、まさに直接へヴィ・メタルの印象を受けるものだ。「原爆？ だからどうした！」という岡本太郎の声が聞こえてくるかのようだ。

僕がここで「わたしの芸術理論」と呼ぶのは、端的に言えば、大江健三郎から得た芸術理論と、岡本太郎から得た芸術理論を、どのように自分の内に整合させるか、その解決としての芸術理論ということになる。僕はこのことに、難渋し続ける数年間を過ごしてきた。

僕がこれまでに重ねてきた実体験には多くの歓喜があった。だから、現在の方向へ僕が踏み込んでいかなかったとしても、どこかで岡本太郎の芸術理論に出くわし、共感し、影響づけられるということはきつとあっただろうと思う。一方、こうして文章を書くことへ深く踏み込まなかったとしたら、大江健三郎の芸術理論にはまるで縁が無かっただろう。もし出くわしたとしても、「なんだこれは」という驚きと笑いだけで見逃されたはず。それで、生身の僕自身としては、気分のよい笑いをもって、岡本太郎のほうを、岡本先生と呼びたくないので、大江健三郎のほうは、大江と呼び捨てにしたい生々しい気持ちがある。しかしこれは、単なる敬意の向け方が反映されていることではなく、大江のほうはもう身近になりすぎて、呼び捨てにしないではやっていられないという心地を反映していることなのだ。

先ほど、歴史的な接続も含めての文学の全体、そのありように向けて唾を吐くようなことをしたのだが、これについては岡本先生の言うところの、「弟子入りしようなんて考える奴は、それだけで芸術家失格だ」ということに当てはまるのみ。現在の僕にとつて、岡本太郎は痛快で実に好ましい人だ。一方、大江のほうは、認めたくもない事実ではあるが、現在の僕にとつてわずらわしいほどの父なのである。僕が「気難しい地味なミイラめ」と反抗的に言わなくてはならないのはそこに向けてのことだからなのだ。

「わたしからあなたへの芸術理論」と題したからには、これはここに仮想した読み手の、あなたにとつて、受け取りによるこぼしものでなくてはならない。賢明で節度のあるあなた、は、芸術などと聞くと、「自分には分不相応だわ」と気の利いた謝絶をするはず。「芸術を、見る側ならまだしも、発信する側だなんてとても」。僕はその誠実な態度を持つあなたに向けて、まったく実用に足らない方を積み重ねていくことで、あなたへの予感をよるこぼせていきたい。あなたを安心させるために言っておくと、ここまでもこれからも、僕は小

難しいふうのことを言うし、もちろんその指し示すところを理解した上で言っていくのだけれども、それでも僕は僕自身を、芸術家だと思つたことは一度もないのだ。そこは単に、思つてもいない芸術家の立場に自分を置いて好き勝手に言えるだけ、僕の性根が生まれつきド厚かましいということに過ぎない。しかし、軍人でなければ手榴弾のピンが抜けないといえるだろうか？

芸術とは何なのか。それは、イコール想像力、想像力の活性化、想像力の賦活、想像力の取り戻し、と言つて差し支えない。では、その想像力の活性化ウンタラが、何の役に立つのかの問題。芸術は、一般的には何の役にも立たないが、突き詰めたところでは逆転して、人間そのものへ最高の役に立つ、とすることができ。人間にとつて想像力とは、それだけで「自己の完全解決」に至りうるものだからだ。これらのことはこれから先に説明されていく。首をかき上げたまま先に進んではかまわない。

さて次に、じゃあその「想像力」というのは何のことなのか？ という問題がある。このことについては、どうしてもこのように言わなくてはならない。

「想像力とは、与えられたイメージのむしろ歪形化である」

ここだけは難しい言い方にならざるを得ない。なぜ難しい言い方になるかというと、それだけ、想像力ということが一般的に誤解されているからだ。「想像力！」というのと、一般には、ただちに「空想」の能力のことへ誤解されてしまう。青い海、白い砂浜……という言葉が並べられたときに、それをイメージ化して捉えなおそうとするはたらきの機能。これは空想であつて想像力ではない。

あるいはいつそ、その「青い海、白い砂浜」を空想しておいてくれ。そこで僕がこのように言うかどうか。

「それは光るあまり湾曲したコンクリートに見えたが、踏み込んでみると歯のきしむような砂浜だった。足指に付着したそれを見ると、砕けたばかりの陶器の碎片に見える。波立つ海の中に、食用でない昆布が集会して踊っているのが見える。その日の潮は空気よりも透明度が高かった。水中を太りすぎた二匹のイルカが威圧的に周遊していた」

ふつう、青い海と白い砂浜を言うのに、こんなまわりくどい、難渋した言い方はしない。なぜこんな難渋した言い方をするかというと、「イメージの歪形化」を惹き起こすためだ。

強引に、分解するところなる。

・砂浜にコンクリートのイメージはない。歯をきしませるイメージもない。

・砂粒に陶器の碎片のイメージはない。

・昆布は食用のイメージだ。昆布が集会をするイメージはない。

・イルカは太つてのイメージではないし、威圧的なイメージでもない。

「自動化」というのだけれども、人間は、物事のことごとくに「イメージ」を貼り付ける。それを貼り付けることで、いちいちじっくり見なくてよいという、想像力の横着を身につける。その横着を、省力化ともいう。ともかくにもサボる。物事・事物を、物そのものの手ごたえを受けながら明視する、ということをする。

サボるのだ。これは、どうやら人間の生来の仕組みによるもの。

この「自動化」「省力化」は、社会生活上では有益な機能だ。たとえば運転手が信号機や交通標識を見ると、その標識のサビ具合や、そこにとまった一羽のハトなどをいちいち受け取っていたら事故を起こす。運転してられない。一万円札の一枚ごとのシワのつき具合などに注目していたら仕事は日が暮れてしまう。だからそういったものにはイメージを貼り付けて、実物を明視するという行為を省くようにする。このことは誰でも当たり前にやっている。自分の知らないいうことだ。

だからこそ、幼い子供の目というのはキラキラしている。まだイメージの貼り付けが済んでおらず、省力化をしていない。いちいちのものを明視しているからああいうきれいな眼差しになる。単純に言って、それは想像力がオンになっている目と言って正しく、比べてクタビレた大人の目は、想像力がオフになっているからクタビレていると言って正しい。目のキラキラは、精神的な問題ではなく、実は想像力のオンオフの問題なのだった。だから子供は仕事や自動車の運転に向かない。

ここで注意。かといって、じゃあ想像力をオンにしようとか、省力化をやめようとか、そんな心がけを持ったって無意味なことだ。そこは根性でどうにかなる問題ではない。根性が、爆裂するほどのものだったら話は別だが……とにかく、ここでは「ほうほう」と理解してゆくだけでよい。

とりあえず、「青い海、白い砂浜」というのが、難渋した言い方のそれで描きなおされたとき、何かグツとその青い海と白い砂浜は自分に近づいて感じられたようなところがあるはず。難渋の文中には、白い砂浜とも青い海とも書かれていないにもかかわらずだ。それはなぜか。それは、難渋した文中がいちいち「与えられたイメージ」を否定しにかかるからだ。分解して説明したとおり。もともと与えられてあるイメージを否定されると、人間は想像力を回復させてもう一度その実物を明視して捉えなおそうとする。そこには、想像力における一種の「体験」が起こるわけだ。だから何だと言われたらそれまでだが、少なくとも、キラキラした目へ接近する方向の何かであることは疑いないわけだろう。太りすぎた二匹のイルカが威圧的に泳ぐ海の映像は、イメージとしてはとうてい旅行案内には使えないけれども、想像力の作用によってあなたに近しい。

こうして、与えられたイメージの固着した、自動化・省力化の対象に対して、否定して歪形化をはたらきかけるやり方を、その感触のまま「異化」と呼ぶ。例として、「食用でない昆布」というだけでほんのり異化だ。もともとから与えられてあるイメージと「異なる」ので、異化という。

こういつたことは、何も芸術でなくても、実体験の上でも起こっている。たとえば、今日でこの学校を卒業するとき。それまで、毎日通っていて見慣れた学校だったから、その学校や教室のいちいちを明視せず、「こういうもの」というイメージを貼り付けて、自動化して見ている。が、ここに起こる異化「与えられたイメージの歪形化」がある。つまり、「明日からは、もう二度と、

この教室に来ることはないんだ」「今日でこことお別れなんだ」ということ。その途端、教室の全ては名残惜しいものに見えてくるし、学校の景色の全てに思い出がくっついていることに気づかされる。それで感極まって涙が出る、ということが起こる。それは、そのときの学校、教室、そこであつた全てのことを、鮮やかな「明視」によって捉えなおしているということなのだ。そのときに切なくて涙が出てたまらなくなるといことが、どうしようもなく貴重で大切なこと、ということとは誰でも知っているはず。ごくまれに、そのことを本当に完全に知らない人もどうやらいるみたいだが……でもほとんどの人は知っている。今は忘れていても、卒業するその日に涙を流したとき、他の全てのこととはどうでもいい、一種の「人間自己の完全解決」のような体験があつたはずだ。強引にだけ言おうと、「自分が生きてここにある、ということの、強烈すぎる実感」というようなもの。想像力論ではこのことを指して、「想像力は人間のステイト(状態)ではなくイグジスタンスである」という。人間の、いい状態、というのではなく、それ自体が人間そのもの、存在そのもの、実存そのもの、ということ。

いわゆる詩人という人間は、四六時中こういう状態にある。もしくは、こういう状態にあるとしている。「他の全てのこととはどうでもいい」「ただ、自分が生きてここにある」ということの、強烈すぎる実感だけを」というのが詩人だ。詩人はそこに確認されるイグジスタンス、何でもなかったはずの全てのものに切なくて涙が出て、貴重で大切に……ということはどうしようもなく言葉を葉に紡ごうとしているのだ。とはいえ、これは想像力における技術を要求されるものなので、誰もが卒業式に詩人の心を持ちえるとしても、その技術を持つわけではないので、卒業式の前後に書かれた感極まったポエムは、後になって見れば目も当てられない恥ずかしさのものというのがほとんどだろう。ある意味、人間らしさとしてはそちらのほうがまっとうだとも言えるけれども。

同じようなことはいくらでもある。ウンザリしていた恋人と別れるのに、別れるその瞬間になると、急に全ての思い出が大切に思えて、切なくて泣けてきてしよがなくなつた、など。引越しのときなどにもそれはある。別れだけではなく出会いのときにもある。特に、生まれて初めての「彼氏」ができたときなど、誰でも心当たりがあるだろう。今まで何もないと思っていた自分が、突然今日から「彼氏のいる自分」という日々を過ごすことになる。与えられたイメージの歪形化だ。これが想像力をオンにするので、ときめきが起こる。目がキラキラになる。何か胸にこみあげてきて、踊り出したくなり、涙が出そうになる。強烈な、「自分はここに生きてある」という実感がひしめいてくる。

が、そうして、交際相手の詳細に関わらず起こってしまうときめきもあるもので、付き合いだして数ヶ月もすると「自動化」が完了して、「何かもう、冷めた」「ときめきがなくなつた」ということになってしまう。想像力の機能はオフになり、何もかもが、既存のイメージどおりとなつた。こうなると、つまり退屈になるわけ、その退屈の中で、今度は相手の悪い部分ばかりが目についてきてイライラし始めることになる。

そうした、「すぐに付き合っ、すぐに別れてしまう」というパターンなども、実は芸術理論上で説明がつけられるのだ。だからこそ、芸術理論を所有するのに何も芸術家気取りである必要はない。少年が、生まれて初めて「夏休み」というものを体験する。朝、目が覚めたとき、普通の気分で起きたものの、すぐハツとなって気づく。「今日から夏休みなんだ」。今日は学校に行かなくてよく、明日も、あさっても行かなくてよい。このまま、午前十時に堂々と家で過ごす平日というのとはどんな気分のものなのだろう！ あるいは家を飛び出して、東西南北、どちらへ行ってもいいのだ、目覚めてすぐに、これから毎日！ こうしたところに、「与えられたイメージの歪形化」が起こっている。朝起きたら学校、というイメージが歪形化されて、子供にさえときめきを与えなおしている。誰もが知っている子供のときの夏休みの高揚というのは、単に学校が休みだからではないのだ。なぜ単純な映画のモチーフが、手っ取り早く「地球滅亡の前日」なのか、それは「与えられたイメージの歪形化」として、大きく、かつわかりやすいからだ……

さて、このようにして、「異化」のことを理解してもらった。与えられたイメージの歪形化が、想像力を改めて活性化する。

この部分まで、大江健三郎の誘導する芸術理論に全て書いてある。書いてあるのだが、この先のこととは書かれていない。異化の重要なやり方としてのグロテスクリアリズムや、文章作品を構成する構造上のそれぞれのレヴェルにおける異化などには詳しく踏み込まれているが、単純な疑問、

「なぜ大江さんはその異化というやつがそんな器用にポコポコできるんですか？」

という疑問に向けては一切回答が書かれていない。まるで、そのことへの才能がない人間は門前払いだ、というような大前提で書かれているのだ。

才能がまるでない人間は門前払いにしかならないというのは、どのジャンルにおいても同じだろうけれど、それでもこのことには、まだ遡れる糸口が実はある。その糸口というのが、今度は大江側ではなく岡本太郎側、自由と爆発という方向へつながっているのだ。僕が今話そうとしているのはどちらかというところからほうだ。

ここからの話は、しばらく一方的に聞いてもらおうよりなくなる。まず、人間のエネルギーの話。人間には根本的に、精神的なエネルギーがある。超能力の話ではない。

何のエネルギーがあるかという、自由に向けてのエネルギーだ。人間は生来的に、「自由でありたい」という希求を強く持っている。このことにはさして疑念も湧かないだろう。

人間は、いうほど自由に生きられないが、それでも自由でありたいという希求は消えず、抑圧されるほどに「自由でありたい」という希求がエネルギーになる。このエネルギーが、どうなるかというのか。どうなるかについて、一方的に言うよりないのだが、エネルギーはたしかに爆発のような手ごたえで結晶化をして、「構造化したidea」になる。何のこっちゃと思われようが、これはこのまま「そうか」と理解してもらおうよりない。注意してもらいたいのは、「自由を希求するエネルギーがあつてこそ、ideaが生まれるのさ」ということではなく、自由を希求するエネルギーそのものが、「構造化されたidea」に直接なるのだ。ideaの素材がそのままエネルギーだと捉えていい。「竹細工の材料は？」。「竹です」というような意味で、構造化されたideaの材料はエネルギーだと捉えていい。竹は竹のままなら竹でしかないが、竹細工ということになれば、一定の構造化をされて構造を持っている形になる。

「idea」というのは、英語圏の接触から知ったことだが、「考え方」のことだ。このことの説明は少々困難。ideaというのは、少なくとも頭上に豆電球が描かれるような、思いつきのことではない。たとえば民主主義と専制主義があつたり、資本主義と社会主義があつたり、宗教があつたり法秩序があつたりする。これらはすべて、人間の作り上げてきた「考え方」、ideaだと言ふことができる。仮に、一枚のカードを伏せてテーブルに置き、「このカードの表が何かわかりますか」と訊くと、英語圏の人からは「I have no idea. / わかりません」と言われることがある。つまり、そのカードの表が何であるか知りえる考え方の方法はわたしには無いわ、というようなことを言っている。いわゆるアイデアマンという言い方をすると、日本では「思いつきの活発な人」というように捉えられるが、ここでidea manと言った場合、それは「考え方の発明が活発な人」という意味だと捉えてもらいたい。そのために、このことを言うときには必ずカタカナでなくideaと表記することになっている。たとえば「武士道」といえば、samurai's ideaと捉えて間違いない。

「構造化されたidea」といって、じゃあその「構造化」というのは何のことだ。これも直接の言い方は難しいので、例を採るよりしようがないが、たとえば国家とえば主権の位置に国民が立っており、その下に三権分立が成り立っている。その三権のうちたとえ行政は、省であったり庁であったりという構造を持ち、行政上の国土だって、県があり市があり区があり町があり、番地があつて世帯がある、ということによって構造化されている。家族や親族だって血縁をそれぞれ何親等に当たるかという構造化した捉え方をしている。企業だって、社長があり次長があり本部長があり部長があり、どこまでが役員でどこまでが管理職で、この構造の上に株主会議がある、というような構造を為している。これはまさに人間の社会のやり方のideaだ。構造化されたideaだと言え。

これらの社会的な *Prosa* は、法文化されて保存されながら運営され、一言でいうと「制度」となっているわけだけれども、こういった構造化された *Idea* というのは、何もすでに法文化された制度の中にしかないわけではない。よくよく考えてもらえば気づくことだけれども、そうして法文化されて施行されている現行制度だって、その実物が物体として存在しているわけではないのだ。圧倒的多数の人がそれを信じて、いるというだけで、本質的にはフィクションでしかない。圧倒的多数が信じているフィクションの上に現行制度が成り立っており、それによって得られるメリットがあまりに大きいので、これを破壊しようという不毛を大多数でやったりしないだけだ。いわずもがな、殺人だ放火だ、法律だ、といったって、もし殺人犯だけ元気で、警察官も法廷の職員も全員が「面倒くさい、知らん！」と云い続けて自宅で昼寝をし続ければ、殺人が違法だとか逮捕だとか裁判だとかいうことは消え去ってしまう。全ての人が昼寝を決め込んだならその昼間に社会は存在しない。もともと、信じられたフィクションとして、存在している気がするだけで、土星とか木星のように実物として存在しているしろものではないのだ。

だからこそ、そのフィクション、構造化された *Idea* というのは、どこかで誰かによって生み出されているのだ。何によって生み出されるかということ、人間のエネルギーから、としか言いようがない。

人間は自由を希求する。その希求がエネルギーになる。エネルギーが何になる？ 構造化された *Prosa* になる。これはほとんど、構造化した *Prosa* を作る、という意思によってではなく、エネルギーそのものが、自動的に、構造化された *Prosa* に結晶化する、構造に結ばれる、と捉えてよい。雪の結晶が勝手に六角形の構造体になるように、人間のエネルギーは勝手に構造化した *Prosa* になるのだ。

岡本太郎はそのような状態で絵を描いている。勝手に結晶化した、構造化した *Prosa* を、キャンバスに描きつけているのだ。だから彼の絵には凡人の絵ではない「何か」が見える。

この「何か」なのだが、これはそのまま、構造化された *Idea* そのもの、人間の自由を希求するエネルギーそのものが、こちらの脳に「見えて」と捉えてよい。これも一方的に言うよりなく、鵜呑みにしてもらえないのだが、人間のエネルギーはきつと脳を経て構造化した *Prosa* に結晶するが、そうして作られたものは、それを受け取る側の脳にも直接「見える」のだ。脳と脳とが直接のコミュニケーションするのである。こちらが意識的にどう思うかの機能を飛び越えてつまり説明なしに「伝わって」くる。

すぐれた歌手の歌声には、無条件で「声が届いてくる」というような現象があると思う。経験的に誰もが知っていることだろう。それは、声を意識的に聞く機能を飛び越えて、脳が直接その声を受け取っているのだ。脳からすると、彼が何を歌っているのが直接「見える」のである。それで、聴き手は何の違和感もなく彼の歌を聴くし、聴き入っているうちに意識の機能がオフになることを体験するのだ。

さていよいよ、このことを前段の、大江健三郎からの芸術理論につなごう。大江側の芸術理論の行き止まりは、
「その異化というやつ、なぜボンボンできる人と、まったくできない人があるのですか」
というところだった。異化というのが何だったか、その性質をよく思い出して

もらって……

—— 本当の異化というのは、与えられたイメージの歪形化を意識的に企むことによつては達成できない。それは異化をやろうとした、気取って意図の透ける、そのくせ結局は何も「見えて」こない、できそこないの異化風情にしかならないだろう。本当の異化は書き手のエネルギーによつてこそ生成される。書き手のエネルギーは、それ自体、構造化された *Idea* にならざるを得ないわけだから、つまり、まるところ、エネルギーのある書き手は「どう書くかの考え方」を發明せずにはいられないものなのだ。この發明された書き方は、旧来からある与えられたイメージのそれとはまったく違うもので、それによつて書かれた文章は、必然的に異化の力を持たざるを得ない。こちらの異化が本質的に芸術に足ると言っているのは、これが単に与えられたイメージの歪形化をするだけではなくて、読み手の脳に直接「見える」というような形で、異化されて描き出されてくるはつきりしたものを明視させてくれるからだ。読み手にとつて、異化だか何だかは知らないことだけれども、「この人の書いていることは、何が直接、見える、よ！」ということは何よりのありがたみなのだ。つまりは、書き手のエネルギーが脳を経て構造化された *Prosa* に結晶化し、その結晶が読み手の脳へ直接「見えて」くるものだから、それが旧来からの与えられたイメージを轢殺していくのみであつて、イメージのこざかしい否定が読み手に何かを明視させているわけでは本当はないのだ。だからこそ、読み手は強力な書き手について、彼を文学技師として尊敬するのではなく、一個の人間として尊敬するのだ。人間の、自由を希求するエネルギーの拓け方という点において。

「わたしの芸術理論」は、このように今言うことができる。異化だ、想像力だ、ということとは確かに正しい。しかし、それをどうしたら為せるか？ という問いに答えるのは、まったく人間的なことなのだ。異化なんか狙わなくても、へエネルギーに満ちた人間なら、一步ごと異化の作用を起こさずに歩くことはできないはずだ。

「わたしからあなたへの芸術理論」。ここまでの話は、なんであれ、あなた、

をひとしきり感心させたり、読みきれずに首をかしげさせて、読み飛ばさせたりなどをしてきたと思う。ここまででも、値打のないことではないけれど、これを面白いながらもやや崇高の類で、縁遠いと感じられるなら、そのことは「そうではない」と言い足して話を続けたい。あなたは、大江健三郎だとか岡本太郎だとか、それっぽい名前にくらか距離を持たれただけだ。

人間は「自動化」の現象を精神に起こす。想像力を省力化し、サボらせるわけだが、これによって目の前のものを受け取らなくなり、明視しなくなる。それで社会生活上は万全にやっていると勘違いし、何なら自動化したほうが一部のことには便利で有益だ、ということだった。

ただ、そうして自動化によって、想像力がオンの状態である、明視/ヴィジェニエを失うということならばだ。つまり、目の前の誰かは、あなたのことも自動化において捉えており、あなたのことも、実は、明視していないということになる。あなたのことを受け取っておらず、あなたという人間そのものを手ごたえに感じていない。彼の脳にはあなたが「見えて」はいない。無論、彼はあなたのことを認知はしているのだが、認知/ウズナバーニエによって体験するあなたは交通標識のように退屈なのだ。すでに知られきっているイメージを再確認することの、無限回の繰り返しでしかないのだから。

このようなことで、何が人間の関係か、何が恋あいか。どうしてまともな美りを得られるだろうか？ 確かに、異性であれば、「この女性はこういうタイプ」「美人で胸が大きいな」というような自動化の認知においても、性的な興味を引き、注目されるということはある。それによって恋仲への誘いを受けることもあるだろう。けれどもそんなことは虚しいことだと、説明も要さず知られていることだ。あるいは異性でなくてもどうか。人間関係として、「この人はこういうタイプ」「いいコだと思うよ、付き合ひやすい」「努力家だし、一緒にいて刺激になるよね」と、それこそ標識記号のように扱われるとき、その扱いがどのよう

に肯定的であつても虚しいものだ。だから、ここで話している芸術理論は、あなたから縁遠いものなどではまったくないのだ。芸術理論としては知る由がなくても、取り扱っていることはあなたにとつても常に、心において最も切実な類のことだ。

せめてそうでなければ、芸術など何の尊厳を持ちえようか？

あなたが賢明であつた場合、あなたはやがて「突き詰めるところ」という言い方で、このように考えることに行き着くはず。

「突き詰めるところ、なぜ、わたしという人間は、向こうから見て、見えない、のだから？」

この疑問が湧くところに、何も躊躇することはなくて、一番実り多いヒントをくれるところに、ただちに接続をしてよい。

「そうか、エネルギーが無いからだ。自由への……」
わたしからあなたへの芸術理論。この話を最も大胆に短縮するならば、こうなる。

「あなたがエネルギーのない人間の場合、あなたは人に、見えて、いない」
このことは誰にとつても危機的なことだし、また前半部に話したうちのナゲヤリふうの言葉、ザコ、ということにも率直に響くのではないか。ザコというのは、まさに評価以前に、見えない、存在のことだ。

注意点はいくつでもある。まずエネルギーといって、力む人が多いけれども、この場合のエネルギーはあくまで、自由を希求することへのエネルギーだと申し述べてきた。これが忘れられて、執着に歯軋りするがごとき力の入れようでは、それはエネルギーではない。「芸術は爆発だ」という言い方にぞらえれば、焼け付き、は芸術たりえない。あなた自身、「なぜかあの人を初めからわたしの脳にはつきり見えた」という感觸の人がいたら、その人のことを思い出せ。その人は、何か得体の知れないほどの、自由さの感觸を持っていたはずだ。

二つ目の注意点。自分のことが相手には、見えて、もいないという問題について、焦るあまり、相手に自分への強力な「認知」を求めても本末転倒だ。求めるべきは認知ではなく明視である。「この絵は名画なんですよ！」と怒鳴りつけることは、認知を強固にするよう依頼しているのみで、肝心の絵画への明視には足しにならず、むしろ足を引っ張るマイナスになる。

注意点の三つ目。自由と、それを希求するエネルギーといっても、そのことは合理的な印象の範囲を逸脱しない。自由と爆発を一边倒で主張した岡本太郎も、はつきりと合理的な人格が明らかだ。

自由を希求するエネルギーが、構造化された Idea を結晶するのだから、その当人が合理的でないという場合、それは Idea の構造化が為されていないということだ。Idea とは第一に「考え方」なのだから、これが破綻して合理的でない場合、Idea が構造化されて結晶化されているとはいえない。「自由」とは「自らに由る」ということで、「好き放題にしつちやかめつちやか」ということではない。むしろ人間は、執着から好き放題にしたいという愚かしい発想に捉われて、そのせいで自由を損なっているものだ。正しく「自らに由る」というとき、それは自由ではあるが分裂的ではない。

その他にも注意点はいくつでもあるだろうけれど、記憶の荷物を持ちすぎることとは、どうせ自由を希求することの妨げのほうへはたらいしてしまおうだろう。

「わたしからあなたへの芸術理論」。改めて、芸術なんてものはまったくどうでもよいことなのだ。その証拠に、ここまでこの話をしてきたのも、結局どうだ。本当に必要なことは、あなたにとつて、僕から語りかけることの何が、見えた、がどうかでしかないか。そのことを、現在「このときあなた自身がよく知っているはず。僕によってあなたが、見えた、のなら、それはあなたへの、少しでも励ましになったはずだ。逆に、もし何も、見えない、ということだったなら、僕があなたにザコ呼ばわりされるのもやむをえないことではないか。

今はここまで話すことができた。この先のことはまだ話される手ごたえはない。この芸術理論はここまでで一定の完成をよるこべる一方、まだまだ重大な奥

行きを隠し持っているのだ。ひとつ、イグジスタンスより上位と思える、「イグジスタンスなんか要らない」と言い放てるような、もののはれ、の体験のこと。ひとつ、静止系と流れ系という系の問題、時間軸に關わる人間の機能のこと。人間の意識は時刻を捉えるのに対し、人間の感覚は時間の流れそのものを捉えうる。人間を不自由にする執着の最大が、この時刻認知についてかもしれない。それはもちろん、時計の指す時刻についてではない……これらのことも、やがてはわたしからあなたへ、話せるときが来るだろう。

「わたしからあなたへの芸術理論／了」

あとがき、笑ったことのある人へ

気がつけば、自ら書き出されるものが「笑い」の周辺へ寄っていたのであり、それを引き受けたまま進んだ。初めから笑いのことを書き連ねようと企図したものでなかった。

僕は、経験から戒められた性質として、「わざわざ弱りきっている人のほうへ肩入れしない」という、頑なな態度を持っている。弱りきっている人のほうへ肩入れをすることは、一見すると良心的な、しかし内実は同じく弱りきっている自分自身を都合よく慰める卑怯なパントマイムでしかないからだ。

弱々しい、同情ふうの笑いは好みではない。

バフチンの詩の断片にこうある。

——すべての物語が終わったとき、なんの新しい話があるろう？

誰にでもこれから先を生きていく時間がある。けれども、その時間に、物語が引き続いていくとは必ずしも限らない。物語が終わっていったって、時間だけはひたすら残るのだ。フィルムの切れたあとと映画館のように……もし僕自身、その物語が途絶えて失せたなら、そこからはもう、新しい話があるような、ふり、をしてはならない。なぜなら、すべての物語が終わったとき、なんの新しい話があるろう？ ということなのだから。この詩の一句は、新しい話を続けてゆこうとする者らに、うすら笑いの中で忘れてはならない厳しい指摘を示し続けている。

僕の生きて進む物語は、ますます、わけのわからないこと、へ引きずりこまれていく見込みだけれど、実際のこととして、僕の話聞き遂げようとする人々の、興味に熱心なというより、臆病なほどに真摯な、まだ物語の続く眼差しがある。不必要には笑おうとしない、節度のある若い人間の双眸。

それらがもし、弱りきった人々の示すそれだったなら、僕などいっそ気が楽だったのだ。どうせ僕はそんなものに肩入れなどしないと決まっているわけであるから。しかしそうではなくて、それぞれ誰も、人並みかもしくはそれ以上の、佳い人間として、社会的にも人文的にも立場と人格を得てきている。その彼らが真摯な眼差しをこちらに向け、僕の話聞き遂げようとする態度を、健気な明らかさに示すとき、僕は彼らに何の話をしたらよいだろう？ 僕は単純な道義心から、そういった人々に損をさせたくはないと強く望む、その上でさあ？

もし、一般的な言いようの中では、十分に佳い人間たりえていたとしても、そのようなことでは到底留まっていられないと自覚する、勇敢な若さの人間があったとしたら。ここにおいては、その人間に向けて、このように言うことができるだろう。

「これからのあなたが、笑ったことのある人、たりうるように、必要な体験のほうへ、自分を押し出してゆきなさい。あなたはまだまだ、その本当に笑ったということが少ないのだから」

こう語りかけることは、きつと間違いではない。単に習慣的な、人づきあいからの生理反応じみた筋肉ケイレンのような笑いや、果てしないオゲレツさの塗り重ねで湧いてくる笑いなどは、現在ありふれている。けれども勿論、そういった笑いは人間のする本当の笑いではない。そして、人間のする本当の笑いというのは、いちいち天使の笑いや悪魔の笑いのことなど、言いたくないのだ。人間のする本当の笑いを知るのに、人間の実物以外の何が必要だろうか？

本当に笑うということのむつかしき、厳しき、果てしなき、それでいて、単純さも、誰しも自分の心当たりを洗ってみれば、まるで知らぬということではきつとないのだ。それで、「笑ったことのある人」へ、これから自分を押し出してゆかねばならぬ。僕はこのようなとき、励ましにもっとも愚直で安易なことを言いたくなる。——いやあまだまだ、もっと笑える。本当に笑うということになれば、そんな生易しいことではないのだから。本当の、笑ったことのある人、が、こんなものであるはずがないだろう！

すべての貴重に思える営みや、自分をへトへトにすることの積み重ねは、本当に笑うことへの、自分のシツコイ押し出しなんだ……そうひとくくりにすることは、十分妥当な上、不敵な若い心へよく馴染むものではないか。僕自身、過去に得られてきた笑いよりも、負けず劣らず上等な、より本当の笑いを得ようとしていくとき、それはタダゴトではないな！ という実感がする。ただちに、それを受けて立つてやろうという無闇な燃焼の心が立ち上がるのである……

「笑ったことのある人へ」。この文言に、二重の意味をそのまま認めたい。「笑ったことのある人」へ、僕はあなたに、そうして笑える時間があったことを祝福し、よろこび、尊重したく思う。そしてこれからの、方向のこととして、「笑ったことのある人へ」。誰もが行く先について、一見すると人それぞれのようにありながら、実は誰も彼も、本当に笑ったことのある人になろうと望み、そのことへゆこうとする、地平への視線の者なのだ。その道程にある誰もについてならば、すべての物語が終わったとき、などということとは、ありもしない仮定にすぎない。

二〇一四年八月 九折空也

おまけ、九〇秒のエチュード

・月光とマルコポーロ

1. マルコは或る町で、「ここまで来たことはすごいけれど、あなたは次の町にはたどりつけないでしょう」とからかわれる。マルコは腹を立てて出立する。
2. マルコは長い道中、いよいよためかど追い詰められるが、或る峠を越したとき、ついに次の町の明かりを彼方に見つけて歓喜する。踊る。「見たか、僕はたどり着いた！」と振り返って遠い町に舌を出す。
3. ところが、踊るうちマルコは、大きな月の青い光を目に受けて、月のあまりの大きさと青さに、「わけのわからない気持ち」になって慌てる。
4. ひとしきり慌てふためいたのち、マルコは急に、「そうか、自分は大人になったのだ」と気づき、身だしなみを整えて次の町へと歩き去っていく。

・詐欺師と冷蔵庫

1. 男はこのところ身分を偽って王宮の社交界に取り入っている。上手くやっている。
2. 彼の家に使いの者がやってきて、とある貴族令嬢との婚姻話を持ちかけられた。男は絶好調。
3. ところが、彼は帽子のかぶり方が間違っていたため、身分がばれた。宮廷警察が家ににじりよってきている。
4. 裏口から逃げれば助かる。彼は一旦逃げようとしたものの、祖母の形見である冷蔵庫を運び出そうとして引き返し、運び出せず逮捕される。その瞬間のあわれさ、絶望。

・怪盗高島屋

1. 時は大正のころ、十歳の少女は、高島屋の宝飾売り場に心を奪われ、商品ケースに隠れこんでしまう。閉店までそのまま待つ。
2. 閉店し、誰もいなくなると、少女はこっそりと商品ケースから出てくる。高島屋の宝飾売り場は彼女のものだ。
3. 豪華なネックレスを借り受け、首にぶらさげれば、十歳の少女でも妖艶に踊り出す。
4. そのまま帰ろうとしたところ、育ちのよい少女は立ち止まり、「これは貴女のものよ」と、マネキンにネックレスを返した。

・ろくろ酒

1. 長生きに強欲な老婆は自分で漬けた、マムシ酒、をこっそり戸棚から取り出し、呑む。
 2. ところがそのマムシは、マムシではなく、侍が切り捨てた妖怪ろくろ首の首だったので、酒はおかしな作用を持ち、老婆は手足がぐねぐね動き始めた。
 3. これはたまらないと、老婆はなんとか気付薬を飲んだが、ぐねぐねの動きが激しく鋭く動くようになるだけだった。
 4. 老婆はついに、秘伝の魔殺しの薬を飲む。が、すでに魔物になっていた老婆は、魔殺しの薬によって急死した。
-